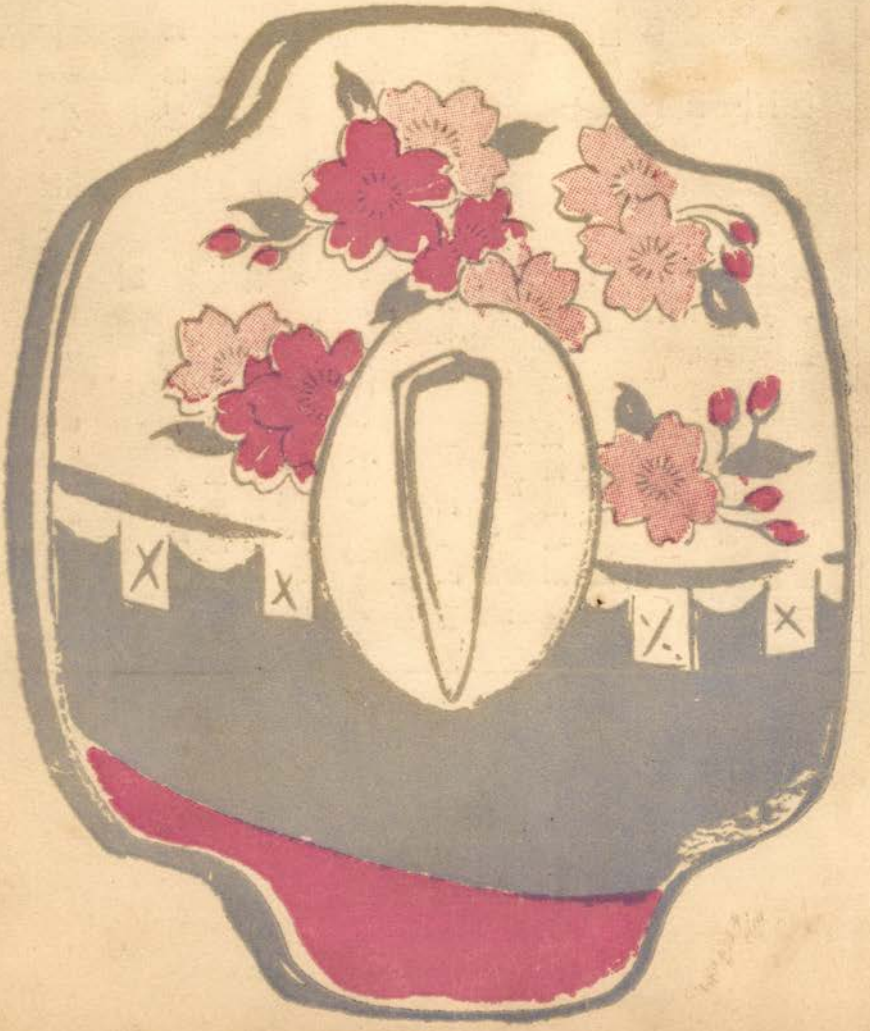
麻生路郎主宰

川柳雜誌

第十一卷　第三號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和九年三月一日發行（毎月一回發行）
第十一卷　第三號
川柳雜誌社發行

川柳雜誌　第十一卷第三號目次

表紙畫　大西長三郎
題字　麻生路郎

文苑

感興　麻生路郎(四)
句をめぐりて想ふ　阿部閑生(一〇)
江戸時代史のここかしこ　西田艸樂(一三)
武玉川初篇研究(一三)　梅本秋の屋
川柳天神緣起(二一)　森東魚(三六)
古狸窟雜筆　蛭子省二
月評　金・銀・鐵　藤里好古(四六)
川柳バイロット欄　梅本塵山(六二)
江戸のうはさ　二南、丹路、鮎美、艸樂、山雨樓(五四)
雜筆　秋　福田山雨樓(六〇)
卵と鷄　佐藤しのぶ(四一)
散る櫻物語　加藤文醉(四二)
「街の灯」とSenryumi　毛利九波(四四)
雀　岡田某人(四五)

創作

作麻生路郎(一)
近作柳樽　麻生路郎選(六)
川柳塔　麻生路郎選(二六)
粒々集　久流美、一徹、五健、柳秀(四八)

日本名所名物川柳　大阪の卷(九)

千日前　麻生路郎選(三四)
本社如月句會　豆秋記(五八)
各地柳壇　路郎、緣雨、二南、整理(六四)

一路集　駈引　膝

住田亂耽選(五〇)
日野華水　須崎豆秋　共選(五一)
柳壇畫報　(二)
川柳書架(五一)　(五三)
川柳家戸籍調　係・山雨樓(七四)
西之町MEMO　緣雨(五〇)
編輯の窓　山雨樓(七五)

近作

麻生路郎

春の寺香具師見ただけで通り抜け

パンとミルク株が上つた顔になり

酒か欠伸か人生の悠久さ

慰藉料で養子をもらうことになり

一升提げて邪魔をしにゆく

柳・壇・畫・報

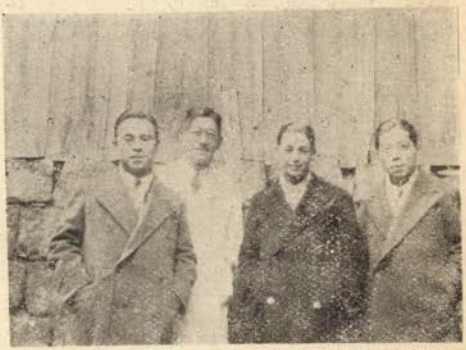
建國祭に因んだ放送座談會

右より 史談會々長 江崎政忠氏・郡郷先生・第三高等學校教授 元田藤 氏春・考古學會八木博士・氏高等師範學校教授 天坊幸彦氏（二月十一日 午後七時三十分ラジオ第二放送）

東京柳壇の富士野鈴馬君とその愛讀

柳・壇・畫・報

南龍五龍勝觀梅會　中央右は舊の家・左は旅傳君
其他は同地の名妓連（昭和四五年二月十二日撮影）



御慰吟詩の　みつる・清美・翠夢・勇諸君
（右より）（北川あや美君撮影）

皇太子御除選奉祝踊姿の細田夕鶴君
（二月十三日寫）

感興

麻生路郎

句は誰でも作れます。何處ででも作れます。が何時でも作れるものではありません。いくら深遠な思想が頭に充ちて居りましても、いくら奔放な感情が胸に溢れてゐましても、感興が湧かなければ句にはならないものです。では、いつ感興が生じるかといふことになりますが、それは或る事物に對して大きな感激があつてからの後に來るものです。感激の瞬間に句になることもありますが、感激が大きければ大きいほど、短い時間では句に纏らないものです。

例へば震災にぶつかつた瞬間には、句は生れませんが、そのあとで怖ろしかつたこと、悲しかつたことが、次から次へと句の形をとつてあらはれます。こどもが死にかゝつてゐる瞬間、死んだ瞬間には決して句が出るものではありませんが、日が經つにしたがつて、おさへてもおさへきれぬ悲しみが、井戸の水が湧くやうに流れ出て來ます。そんな調子で出來る句には、ほんとにすぐれた句があります。平素作らうとしても作れない句が出來ます。恰度火事の時に平素は迚も持てない品物を平氣で運び出す樣に、感激が强いと自分の夢想もしない巧みな句が生れるものです。

しかし斯うした感激を得るために、そんな特別な境地を自分で作り出すことは出來ませんが、感興が湧かないからと云つてたゞ手をつかねてゐては、遂には永久に句を生む機會を失つてしまひます。ですから感興は自らつくらなければなりません。誰でも句が作れるだけの思想や感情は持つてゐるのですが、俗事でさまたげられたり、曇らされたりしてゐるうちに句を作る氣分を見失つてしまうのです。だから、たゞぼんやりと感興の生じるのを待つてゐないで、自分で感興を喚起する方法を採ります。それには自分ながら呆れるやうな下手な句でもいゝからペンを持つて紙の上へ幾つか並べて行くのです。三句四句五句

とある境地を、時には同じ境地の句を詠んでゐるうちに、心がある一事に集注して來まして一句となります。これとても天來のものではなくて、矢張り作者の過去に於て感激した事物で記憶から薄れ去つてゐたものが、再現されて句となつたのです。そうして次ぎと〳〵句が生れ感興が高潮に達するに從ひいゝ句が出來ます。運座などもこの感興を作るために時間を裂いて集まるのです。だから準備のない人々は最初はなか〳〵句に纏りませんけれども心を沈めて一心にある事象に集注させますと遂には感興が湧いて、比較的樂に句が作れます。ウンウンめいて作つた句に案外物足らなさを感ずるのは感興が高潮に達しないのに句にした結果だと云ひ得ます。私はこの感興を喚ぶために作る最初の未熟な句を作る時間を滑走と呼んでゐます。飛行機なども突然上昇しないで、飛ぶ前には必ず滑走をいたします。詰まりあれです。句作も感興を喚起するため滑走をやるの必要があります。感興が湧かぬからと云つていつまでも手をつかねてゐてはなか〳〵句は出來ないものです。

火事の時に出る非常な力は、矢張りその人が持つてゐる力です。けれども火事の時でなければ出ないのです。ふだんにはそんな力は出ないと思ふから出ないのです、火事がすんでから、もう一度持つことさへ出來ないことをよく經驗するふのですが無い力なら出る筈はないのです。ある力をたま〳〵火事といふ非常な時に出したのです。句作もそれで自分に無いものは逆さまになつても出るものではありませんが、誰もが自分にはそんな句は作れないと思つてゐるから作れないので、作つて見たら意外な句が出るものです、それを神秘だの靈感だのと考へるのは間違つてゐます。矢張り火事の時の力のやうに、作者が持つてゐるものを、たまたま感興の最高潮に達した時に再現させて一句をなすに過ぎないのです。だから句作の上に感興といふことは大切なことです。

それから感興を喚ぶために下手な句をいくつか並べるかはりに、先輩の句を讀んだり、他の書籍を讀んだりすることも必要です。何かそこに心に觸れるものにぶつつかると堤が切れたやうに句が出て來ます。尤も先輩の句を讀むと知らず識らず模倣に陷りますから其の點は充分に注意しなければなりません。

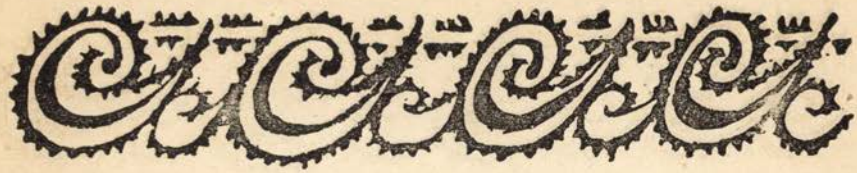
次に散歩するのもいゝことです。巧みな寫生句などは、都會雜觀や郊外の散策などから生れる場合が多いやうです。例へその句が坐つて作られたとしても、その時の印象が再現して句をなすのです。

シルレルの如きは腐つた林檎の香を嗅ぐと詩興が湧いて來るので、いつも林檎を机の上から離さなかつたそうですが、必ずしも前述の方法に限つたわけではなく人によつては意表外な方法で感興を喚ぶことが出來るかも知れません。(不朽洞柳話より)

近作柳樽

路郎選

人間に失望したり桐の花　　蘆ケ池　愚寵
工事場をみてりやさびしさ飛んできた　　同
冬の夜を遺言じみた日記書く　　同
死は易きことなり我らたたかはむ　　同
嫁にゆくまではうれしいお正月　　大阪　觀月
放浪の子をふと想ふ麥の色　　同
君と居て群集心理はたらけり　　同
机上論汗の溫度がわかるまい　　同
一樹ありこのあめつちに冬來る　　同　町二
日は黄なり荒き風吹き瞼を吹けり　　同
夜盗躓ける白菊の鉢　　同
愛の巣をうごかして汽車通るなり　　同　大門
雲が眼についてマラソン拔かれたり　　同



初誕生

人並に汚ごしてるなり足袋の裏　同
葉牡丹に惱みの息をかけんかな　双ヶ丘　晨一朗
五尺六寸五分病床に丸く寢る　同

嫁くA子さんへの悲しき諦め

裏切つたのではないそれがほんとうなのだ　同
更生の村正月を無表情　長野　柳兒
嘘してから末席のいたわられ　同
正月の異端者茶漬の音をたて　同
獅子舞ひの這入るに低き庇かな　大阪　舟々
鐵瓶の音は悟れとある如し　同
ひとり遊びが出來て冷たき赤き手よ　同
ゐろりは赤し公憤を持寄つて　長野　有爲郎
農夫の鼻へ雪がからかふ　同
黑い壁で黑い顏で農夫等の冬　同
蠟の効用とは君さみしいね　大阪　以都女
さら〳〵と一つの命砂の音　同
クロカスの芽が伸び師走の風となる　同
喰かはけり西北の風で塵捨てる　島根　羅門

心虚しひる風鳴れり木が鳴れり　同

あゝこゝろの焦點がない白飯　同

押出せば元に戻らぬチュウブです　八幡　十七八

來いと云ふから伺へば養子口　同

洋服を着て食ふ事に追はれがち　同

殺された役者へ樂屋からの風　神戸　某人

手紙燒くけむりは空にねぢれゆく　同

こはゞつた顏わらはせて借る話　同

正月の山に陽がある交叉點　九葉

マ[illegible]ルクスの熱はさめたりバツト級　同

病院の廊下が長い花を提げ　高知　映珠

すき燒の匂ひの中の馘首案　同

ひとつかぎりの空をかなしむ夜のあり　櫻ヶ池　嘖兒

錢とかやつめたきものをひろひたる　同

光る金齒が借りる口上　大阪　利生

佐渡の海賞めつゝ猪口が往來する　同

その頃の主席テキヤの鞭を振り　同　沐天

慕ふ娘へ明日は發つ日のボヘミアン　同

作業服妻子があつて唄若し　同　朱郎

春風に唇派手なパスガール　同　同

初戀の顏に似て來る人形師　臺中　耕朗

女の香靜に風がもつて來る　同　同

きつね卷いてる女の顏を見てやらう　神戸　貧兒

ぼくに何故ロシヤのことを惡く云ふ　同　同

ときれてから派遣婦の氣が目立ち　愛媛　宵明

決算のお茶をすゝれば除夜の鐘　同　同

スイツチを切つた心にすきがある　高知　梨生

祖母一人すねた姿で春をまつ　同　同

姉妹ゆめの話は美しい　鹿ケ池　松雨

冬の風鼻の尖つた女かな　同　同

三三年の日記に汗がにじんでる　今治　小松

腕力もこだまにひゞく江戸なまり　同　同

怪物に似てお役所の大晦日　大阪　素月

日の丸に落着があるお元日　同　同

山々の雪かむりもう產まぬ鷄　同　葉光

力なく熱ある唇で吸ふ蜜柑　同　同

現實と別な心に春三日　同　木圭

寺の春奥様だけが肥えてゐる　同　慕秋　北海道

カフエーを出てどこまでもいゝ月夜　同　道子　堺

オフイスに今日一日を機械じみ

手を拭いて隣の留守へ返事する　同

木枯に紙屑醉ふてゐる姿

母喜壽を迎ふ

饗饌として雑煮餅食べ上り　同　明坊　神戸

甚平など着る氣になつた妻淋し　同　茂都子　島根

だれはばかろう大根切る音　同　眞弓　桑ケ池

煙の様なすなほさはきらひです

びやういんのぞうにがかたいお元日　同　葉香郎　扇出

冬せまるわたしの頬がおちてゐる

忘れたい氣持に委す花鋏　同　青雨　高知

飛込めば死ねる甲板春の風

粉ばかりの煙草に明日を刺戟され　同　史郎　今治

躍いだ足をいたはる間も忙し

あの黒い娘も嫁に行くといふ

恢復期音のする腕振つて見る　同　愛媛　紅默

蟻地獄を喰ふ蟻地獄大都會　同

石塊みちばかり歩いて又師走　ひろし　双ケ丘

今は亡き女のベッドを撫でて見る　同

街の空仰いで窓をしめるなり　末廣　大阪

御祝儀は白粉代にも足りまへん　同

三味線を男にかせば裏を見る　翠峯　大和

仲居もう地主と聞いたゞけで惚れ　同

女の子ばかり生んでる甲斐性者　栞　大阪

豆炭をほつて曳子が寒う居る　同

又してもガゼンを好む女なり　茂もよ　神戸

晴衣着て生れ故郷を思ひゐる　同

北風が身にしむらしい出勤簿　巷巴　聚ケ池

活けし花佛の花に似て淋し　同

結ひ上げた姿靜太へ見せにくる　守　福岡

二階から見てもやつぱり日本髪　同

船長の苦心大きく搖れてゐる　いね三　靖玉

あてられた恨み惡友筆にたけ

涙する母の口説がや古手です　　同

吸取紙に神經質なお孃さん　　松江　あきら

鉛毒に漂白された白き手の　　同

はや二月烏の聲も聞かず暮れ　　高知　珍景

街なかを鼠の走る午前二時　　同

長男であつてうつろな鍬をとり　　愛媛　國彦

新聞にのつた娘をやるといふ　　同

すら〳〵とラブレターではないのなり　　今治　蛇之助

空腹へベルトの音がはたとやみ　　同

金のない時に眼につく慈善鍋　　大阪　岩石

五十五の母が國防婦人會　　同

疫痢菌わが子のかたきとは悲し　　同　ライト

死んだ子が友の心を見せてくれ　　同

白粉に小言が云へて女事務　　同　はるを

死んだ妓の小箱から出る稽古本　　同

松かさの靜けさ工夫下に寢る　　同　花涙

米粒のあばら下水の底に有り　　同

おいらんを買つて自慢にしまひようか　　加賀　義風子

搾取する空のつれなき灰色よ　同

元日からまた〳〵稼ぐ注射針　大阪　たけを

食ふて寢て子なき夫婦のお元日　同

ちらばつた桶も寂しきしまひぶろ　神戸　朝雨

はずかしいようにぜんざいやへはいり　同

師走空たよりの來ない日が續き　鷲ヶ池　縷紅

カルタから國旗の街を戻つて來　同

寢る幅がどうにもならぬ三等車　松阪　沃里

正月を東京に遊ぶ

東京は燒けてゐるのでない夜景　同

鐵火肌も逢えばどこかにすつとんで　松江　冷子

すき燒に嬉しい頰を赤く染め　同

病氣を忘れやうとする手が靑い　鷲ヶ池　靑鬼

病院へ乳母の名で來る家傳藥　同

操短にフエルトはいた娘が歸り　高知　鐵吉

電線のうなる眞下の畑を打ち　同

寒風よ俺の晴着を笑つたか　新居濱　白羽

目をぱちり〳〵女は金の事　同

自尊心今日から捨た外交員　大阪　小三

事務にまで社長の趣味が惱せる　同

戀しさをうつかり母に話じてゐ　大阪　美千代

君が爲引いてみくじのうら淋し　同

正月を蔑んで飲むヂキフオリン　大阪　富王

全快をしてボーナスもこれでよし　同

縫紋の蔦にゆとりのある瞳　京都　竹雅

春待てど春に貸あるわけでなし　夜王

アイススケート

何もかも忘れた顔ですべつてゐる　大阪　一羊

クリスマス

煙突のない施療院淋しいな　愛ヶ池　蝶々

一年の計は虫齒を治すこと　叢川　鴉天

食ふことが他人に負けぬとはかなし　金澤　今雨

菊を見てほめ　様下手で怒られる　高松　柳夢

トランプの仲間になつた母うれし　神戸　彌之介

死ぬ迄の味方銅貨の輕るすぎる　名古屋　三八良

しく〳〵と泣く娘をどなる段梯子　神戸　吉左右

幼兒が一人笑へば皆笑ひ　大阪　菊路

カフエーのおよそ畫間の馬鹿らしさ　大阪　九文錢

朝鮮踊をみて

指先の凍る十二時まで踊り　同　公子

うどんげの咲いた病室のにぎやかな　愛ケ池　公平

血を吐いて死ぬ空想も繪の如し　石川　しとし

ねんねこにくるまれし瞳にお月様　今治　芳岸

失職の愛にやつれたプロフイル　愛媛　松花

冬枯れに編物する妓　豆嚙む妓　同　世都象

田を打てばすかさず百舌鳥のおりてくる　同　孤鶴

金策に行くへ帽子を借りて來る　京都　貴代志

義憤とは女の肩をもつ心　大阪　寒草

苦しめば世間はみんな嗤ふやう　同　いの助

禮服を着て手も足も長く見え　同　誠一郎

美ましい聲でいびきの主を訊き　愛ケ池　左人

下宿のばばさんに

死んだ娘の瞳を追ふか淋しき日　鳥取　法泉子

煙草輪にふいて色街通り抜け　松江　祥月

妹を見送る夜のハーモニカ　神戸　霞川

溜息を吐いて女給はつと立ち　　絲水

愛しえぬ惱みとはなり霧をゆく　京都　波樓

鏡臺へ自分の年を見つめる日　松山　靈子

決斷のにぶさ蒲團のなかにゐる　武東川　遊歩

かるたとるにも馴れてゐる戀敵　大阪　桂風

船場に育ち三十の紺絣　同　さつ美

結ひ立ては女房あんまり働かず　同　正一

失職は妻も言葉を考へる　今治　伶人

現實と知つてため息出るばかり　同　小樓

病んで居て君戀をしてどうするの　曳ヶ池　香月

お月様なけて言へない女です　島根　好郎

非常時の話に仲居手をあぶり　京都　丁路

冬の陽へ踏切番の背の丸み　奈良　柳志

ストーブを我物顔に醉ふた客　大阪　春海

兒の病室

木枯へ春の氣溫を保つ部屋　同　泊童

苦學生デスと春畫を賣りに來る　同　愚堂

清水の舞臺から見る積る雪　同　笛秀

初勤め靴のかゞとが鳴つてゐる　同　陸奥雄

電柱の姿で泣いた生活苦　松江　榮吉

新しい氣持が欲しく髪を刈る　今治　輝親

失戀の瞳に猫も逃げて行く　同　バット

下宿の飯を喰つた子が掃いてくれ　神戸　三九

女房にも懸引のある十二月　和歌山　昨夕

エプロンでかくす女給の五月帶　廣島　蛙庵

緣談を皆斷つて噂され　大阪　元山

大の字に寢て居て金が無いのなり　同　白嶺

新世界にて

投賣の本日限りを續けて居　同　涙雪

母病んだまゝまな板は乾ききり　今治　かつ秋

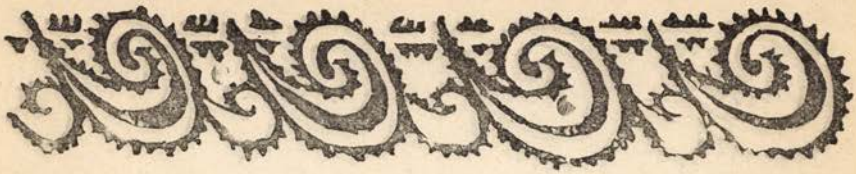
青春の心押へて犬とゐる　同　一風

落葉のなかで友を得たうれしさ　發ケ池　月氏

元日の足音聞いて寢てゐたり　京都　閑三郎

面會の雪の帽子が置かれあり　和歌山　一曉

これ見よとクリスチヤニヤへ雪煙　神戸　晃路



折鞄辨當の汁が氣にかゝり　大阪　天馬

目らを汚す仕事が錢になり　同　正夫

社會鍋眼鏡ある人よくしやべり　同　美津女

小說が好きであぶない戀をする　同　しのぶ

風向が變り冷い豆腐桶　今治　五郎

埋れておれず事務服まとふてみ　同　一郎

青春のこゝからエレヂー續くなり　松江　冷兒

デスマスク影がかはつて居て淋し　京都　清春

口きかぬ友といつしか爐に解ける　神戸　木通

百貨店食堂

色替えてウエトレスではなかりけり

もみ消したバットに心よまれたか

うらぶれの「薄志」と空に書いて見る

ランドセル帽子の汗を母に見せ　今治　小車坊

空氣銃名人

相談が出來てる樣に雀落ち　同　雨翅

社長さん髯も妾も出來ました　松江　夢迷

そ「と」ふ「れ」て傷む「心」が戀か知ら　同　魔人

家中がだまつて居るにフト氣づき　富山　照坊主

お向ひは忌中氣兼のしめ飾り　西宮　三代吉

母様は夜が長いとて足袋綴り　大阪　鈴江（十三才）

懐手して妹に無心に來　同　堅

上品な遍路姿の二人連　同　久子

思ひ出の池に佇む久しぶり　同　良之佑

チンドン屋一ト月踏んだアスファルト　松江　千草

令嬢の戀は冷きむくろにて　同　愁雨

青空に似し希望に生くる父となり　綾川　傳重

破瓜期といふに悲しいお體操　大覺寺　輝亭

岩おこし本家と云ふが多すぎて　兵庫　晴風

も少しと思つて一年はいた下駄　富山　照坊主

忘想のたうつ夜にバツトつけ　大阪　阿古

大雪谿も一度自然を讃めたゝへ　同　清美

結婚の話がはづむ春まじか　同　春海

小説に耽り袂を燒き焦し　同　美和

炭火はぜて話途切れる奥座敷　同　愛子

盗難にあへば鐵瓶が滾るなり　同　朴甫

句をめぐりて想ふ

阿部閑生

事理一味

筆を執ればよく說きよく論じながら、よい句を作らない人があり、句はうまいが記事にはたど〳〵しい筆遣ひをする人がある。能文の人は句を文の一片に墮せしめ、名句の作者は文を句のぬけ殼たらしめるのであらう。

昔、幕府の指南役鈴木清兵衛と云ふ武術者が或日二人の高弟に云ひ含めて交代に、副將軍松平定信をさん〳〵に投げつけ叩きつけさした。定信腑に落ち兼ねて難詰に及ぶと「門弟の中に理と法とが能く判つてゐて技に拙いものがあり、技に長けてゐて理と法とが能く判らない者があります。後はよく卒業しますが、前者は多く中途で止めて仕舞ひます。」と偖て開き直つて「一度お業を崩してから亦導きまゐらする一術がござりまするいざお立ち召され」と手を取つて敎へたので、定信も豁然として悟り、遂に事理一味の境地に到達したと云ふ、幸ひなるかな川柳には試合がないので永久に負けと云ふ事を知らない。

銅像の顏へ焚火のけむりあげ　大門

多作寡作

作句の習練としては多讀多作に如くものはないであらうが、これは勿論方便であつて目的ではない。多作の寡作といふ所へ落着いて、その寡作のうちに紛らふ樣なき自分を見出さねば嘘である。

多作と云ふだけでは、西鶴は一日に獨吟二萬三千五百句を唸つてゐる。二十四時間で割つて平均一秒間に三句弱の割合で、書留めるに骨の折れる早さであり、この外にも一日千六百句四千句などの記錄がある。二十歲で既に點者になつてゐる所を見ると才は嫉れてゐたであらうが、異樣に捻くれた狂句めいたものばかりで阿蘭陀西鶴の異名を頂戴した外に取柄がない。四十を越してから小說に轉向、好色一代男に筆を染めて居なかつたら西鶴の名は恐らく一代を出てゐなかつたであらう。

ふと吹けば泡のかなしさふと消える　噴兒

自己省察

作句の西鶴を前にして、小說では後に一夜で一聯の長篇を書き上げたニイチエ研究の竹風がある。速吟も健筆も時に感興に乘つてのそれは美しいことではあるが、獨創と云ふものには思はぬ所に缺陷のあるもので、作後の昂奮中には發見し難い。紅葉が原稿紙に對して、爪を嚙んでは字句を消し、字句を消しては爪を嚙んだのは、自己省察を繰越したもので、殊に作法に於ても岐路の多い川柳習作の途上にあつては、推敲の興味を會得すること、成句の取捨を詳らないだけの素地を養ふこと、他人の句と比較して自句を見直す習慣をつけることの必要を感じる

皆出世してゐる賀狀座りかへ　柳兒

側面描寫

煙草は自分で思ふ存分に吸ふよりも、人の吸ふのを時折傍で嗅ぐ時に、捨て難い味を見出す、三民主義の本尊である孫逸仙は平常居室の隣に、專門に煙草を吸はす小室を設けて置いて、微かに漂ふて來る紫煙の末端を味つてゐたと云ふ事である。

深い思想、高い感情の暴露を生命とする川柳も、まともに打つかつて行つて呆氣なさ過るか、不消化の場合には、觀點を反らしてさあらぬ一角を捕捉するのが、刺戟的でも効果的でもある。單にすば〳〵吸つては味ひの出ないもの、煙草に限つた譯ではない。

メガホンのまともの聲に叱られる　大門

川柳文字

現代の川柳家によつて川柳文を確立することは、一つの興望であつて未だ達せられてゐない、これを既往に求めると芥川龍之助の「朱儒の言」など如何なものか、更に遡つては「箸は二本なり筆は一本なり衆寡敵せず」の齋藤緑雨がある。現代ではやゝ趣を異にするが大朝の天聲人語などうまいもので、日によつて不出來のこともあるが、「硯滴」など一讀すると矢張天聲子は堂に入つてゐる。以前は萬朝報の「机の塵」も相當なものであつたが、概して各新聞のこの寸鐵欄は讀者の範圍が廣い割に物足りないのが多い。こゝは當然川柳家によつて洗錬味を發揮せしむべきでは無からうか、尤もこの方面に萬目荒涼たる川柳界でよくこれに當り得る者は一二を出ないであらうが。

一ト筋の繩の姿も十二月　路郎

非社交家

川柳は社交なり、の言は近頃穿つたアイロニーである事は、社交のみで川柳家になり濟してゐる個々の實證によつて明確とも云へる、句を練るよりは茶を汲むことの巧みさを意味する、それの拙い者には川柳は無理と云ふのである。

その昔、良寛がある壇家に客となり、座敷へ通つて床に掛つた一軸を見るなり自分も繪の狗の形に仰向きに轉んで見た所を其家の奥樣に見られ急に取繕つて素知らぬ顏に坐り直したと云ふ事であるが、この邊迄は達し得ないで、日常の應接に手も足も出ない手合は、實際川柳どころか現代を諦める準備も必要だ

惠れぬ男倉庫で髯を剃り　春水

藝術至上

明治維新のどさくさ紛れ、爲恭と云ふ畫家は繪に熱心な餘り朝幕兩家へ氣輕にそして無遺作に出入りしたお蔭で、在京勤王の短氣連にスパイ視されて遂にその毒刄に刺され、節齋と云ふ律氣な漢學者は天誅組の義擧に逡巡して、門出の血祭にあげられんとした劍の下から、「乃公なくんば誰か卿等の義擧を千載

に殘さん」と云つて生を全うしてゐる。こんなのは社交處世の巧拙是非を跳び超えて、藝術家として自然に處し偶然に歸した迄でその運不運さへ俄かに斷ずべきでなく、川柳は社交なりとは遠い別世界のものである。

緋の夜具が硝子に映る拭そうじ　　艸樂

形影無二

一方の道を丈高い商人が旅行用具と商品を容れた皮鞄を提げて來る。他の方の道を一人の坊主が來て、出合つた所から道連れになつた。路傍にこんもり繁つた一本の樹を見出した時、俄かに空腹に氣がつき、その木蔭に憩んで二人で食事をし、序に午睡をした。狸寢入りの坊主はやがて皮鞄から石鹼と剃刀を出し、商人の頭を圓々と剃つたうへ、その上着と自分の法衣を着替へ、皮鞄を失敬して逃げ出した。後で目を覺ました商人が、邊りの景色の變つてゐるに驚き、「やあ坊主は何處へいた」と思はず頭へ手をのせ、くる〳〵撫で廻し見廻して、「坊主は此處に居た」と半ば安堵し、「では自分は何處へいた」と遙かに影を追ふて「自分は彼處を歩いてゆく」とまるで安心したと云ふ話が耳の底に殘つてゐる。

自分の川柳が自分について來ないのも弱るが、上滑りをして自分を置去りにされても迷惑である、後になれば待つてやり、行き過ぎれば呼び戻して、影の如くぴつたり身に添へて置かなければ、妙な地點に自分を認めて、終生この嘶に取憑かれる懼れがないとも云へない。

植木屋の梯子の下へ子が歸り　　明珠

不安定

日本人はまア餘り日本人過ぎるな、嫌ふんぢやない、厭がるんぢやない、何も彼も日本流に押し通すので寄り附けないんだなにまだまだ變るさ、安定はしとるやうだがね、變つてゆく狀勢でもあるよ、世間で言ひ觸らしてゐるやうなもんぢやない、さア十年前と何方かな、少くとも善くはないね、物資も缺乏するぢやないか、何せ日本を除いては何處からも何も來ないんだからね、奥地なんか全くひどいよ、然し不安定こそ安定への階程であり、未解決こそ解決への進歩だからね。

と隣りの食卓で二青年の對話、終りまで聞いてゐると川柳のことでなく滿洲談であつた。

呑み仲間仕事始めを見とゞける　　新水

純情

人丸よりも赤人よりも憶良の歌に近代感のひらめくのは「瓜食めば兒ども思ほゆ、栗食めばまして忍ばゆ、何處より來りしものぞ、眼かひにもとなかゝりて、安眠しなさぬ」の兒等を思ふ歌の父性愛から來てゐると思ふ。この歌が陶淵明の「五男有りと雖も、總て紙筆を好まず、阿舒は既に二八なるに、懶惰故らに匹なし、阿宣はゆく〳〵學に志せども、而も文術を愛せず雍端は年十三なるに、六と七とを識らず、通子は九齡にして、但だ梨と栗とを覓む、云々」といふ責子の詩と緣があるか無いかも興味ある問題だが、凡そ純情は兒に對する親に如くものはない

家齊將軍は五十一人の子持ちで、是等の子女の緣付仕度で用達町人は目を廻し、それが文化文政の豪奢の中心となつて、江戸の市民は泰平を謳歌したとある。

松方侯には最近露油買込みの幸次郎氏を總領に何人の子が有つたか、嘗て明治大帝から御冗談に「卿には何人の子が有るか」と御下問のあつた際、少時愼重に考へて「一應取調べましたうへで奏上仕ります」と罷り下つたそうな。後入齋の名ある所以である。

子澤山僕の枕は何處へいた　　路郎

江戸時代史のこゝかしこ

西田艸樂

江戸の年代

その時代の社會相を知るよすがとしては、正史に傳はらぬ、種々の文藝作品が最もよき手引となるが、一方これら文藝作品の研究家がその時代の正史に精通してゐなければ、其解釋などに往々見當違ひをしたりする事がある。川柳研究家に於ても、柳樽の研究はよいがその發刊された時代の歴史をも十分腹に入れてかゝらねばならぬ事は申す迄もない。

久良伎翁ですら、新編川柳江戸砂子の序文に「先年相模叢話を編成するに江戸の年代が分らず云々」と書いて居らるゝが、先年とは何時頃か知らないが、久良伎翁の川柳研究は遠く明治の中葉からで、右の序文が昭和五年十月に書かれたので見ると翁ですら江戸の年代をよほど永く知られなかつた樣子だ。

その序文にある通り、寶暦の次が明和、次が安永、次が天明次が初代川柳の歿した寛政である。柳樽は明和二年に初編が出て、寛政十二年迄に二十九編が出、それから後は享和は飛んで化、文政、天保と年代を追ふて、三十編以下が發刊されてゐるが、吾々が古句研究上最必要なのは、右の寶暦、明和、安永天明、寛政頃でその頃の年代はどうしても記憶して居ねばならぬと同時に、當時が德川幕府に於ても、文治主義の基礎が確立したと思ふと、天變地妖相次いで起り、非常に多端な時でもあり近世史の上にもよく記憶すべき頃である。

寶暦十年は九代將軍家重が長子家治に職を讓つた。此の時代から田沼意次が家重の小姓より老中に迄出世して幕政に專横を極めた。

寶暦代は八代吉宗が中興の英雄と呼ばれ、漸く幕府の財政の窮迫を立直し銅錢の鑄造業にて財政は輓回し、社會も久し振り景氣を謳歌したのであるが、明和になつて天變地妖と田沼の失政などで再び不景氣となり、世は騷がしかつた。世の中が斯の如くあるに從つて屢次改元が行はれた。

家治が寶暦十年に右大將任官の年、江戸に大火があつた。

左右よりひの出をあふぐ右大將
げにおほやけの御代ぞめでたき

なんて皮肉つた者があり、

明和七、八、九年と旱魃が續いた。九年の二月には目黒行八坂から出火して千住まで燃え拔き、江戸の三分一を焦土と化した。更に秋になつて關東、奥羽、東海道から九州に亘つて大暴雨の襲來を受け、こゝに安永と改元されたが、その二年に激烈な疫病が流行して江戸では二月から五月までに十九萬の葬式を出したと云はれる。明和九年が安永元年に代つた年。

年號はやすくながしとかはれども
諸色高直いまに明和九

の落首がある。

更に安永六年は各所の火山の活動期で伊豆の三原山の噴火を始め、大隅の櫻島の爆發、天明と改元されても、その三年に信濃の淺間山の大噴火が初まつて、附近の慘害甚だしく震動は遠く九州に及び、降砂は關東一帶、一坪に一石三四斗に達したと稱される。その時の世相が、

砂や降神世も聞かぬ田沼川
米くれないに水野もうとは

此の水野は田沼の股肱水野忠友である。

淺間しき富士より高き米相場
火の降江戸に砂の降とは

によつても當時の甚だしさが覗はれる。

俳諧師西鶴

番傘の二月號に塊人氏が西鶴情事の俳諧化の題下によい文章を載せて居られる。そしてその中に「こんなに、簡潔に淡白にそして滋味のある書方は西鶴なればこそです、これは西鶴が長い間、俳諧をやり、その後好色ものに轉じたからでありませう」と云はれてゐます。そうです、「西鶴情事の俳諧化」でもあり、俳諧の情事文化即ち浮世草紙化でもあります。西鶴は談林の俳諧師で、奔放自在な速吟家であつた。延寶八年に生玉社で一日に四千句を吐き、貞享元年には住吉社頭で一日一夜に二萬三千五百句を吐いて世人を驚倒せしめた。彼は天和二年、師の西山宗因の死んだ年突如「好色一代男」を出したっけれども、これは小說としてはまだ、幼稚と云ふか、兎に角完成されないもので好色一代男の各場面に於ても前後の連絡なく、一卷の小說體とする構想はない。場面々々の小話で、そこに歷史家は談林の點者が大盡の幇間として酒間の興を添へた巷談、猥談を筆に移したものだと云つてゐる位で、彼は寧ろ俳諧の味を情事物語に託して遺憾なからしめたとも言へる。

えらいやつちや

紀元節の三日前に、奉祝の一隊が府廳を訪れて、奉祝の意を表したところ、面を食つた知事官房が、そんな催物の許可をいつしたのかと、保安課へ訊いてみると、保安課では、奉祝週間の取締方法は決定してゐるが、許可はしないとの事、許可なしに取締方法も變だが、取締方法の趣旨が違つてゐたのかも知れぬが、なんせ慌て氣味の大阪人は、サア踊れと來るから、これは國民誠意の發露であるから、意にまかせて置けと云ふ事にな

り　有無を云はせず「えらいやつちや」と跳ねまはる。誠にえらいやつちや。

大朝の天聲人語子も、上方では「踊ると景氣が立直る」との俗諺ありと云つてゐる。踊ると人心を興奮させて購買心を唆るといふ心理狀態と、「えらいやつちや」の起りを史實に徵して見ると、なるほどうなづける。

「えらいやつちや」は明治二十七八年の日清役に我軍が一城を略し、一壘を拔くの報に接しては國民雀躍の發露する聲だつたと謂はれるが、大阪では、「えらいやつちや、まけなよ」とつけ加へる。この「まけなよ」は天保十年の豐年踊の時の文句にもある。

天保十年にまだ德川家齊が大御所として政權を握り江戸文化の爛熟期の文化文政の餘波が續き、人心の廢頽氣分は十分に殘つて居り十二年、古今未曾有の野暮宰相水野越前守忠邦の大野暮改革をやる直前なれど、幕府の御金藏は空つ穴、町民は不況のどん底の時である。時に京都の今宮社の地築があつて踊り出したのが豐年踊で、その時の文句が、

おどろか、おどろ、まけなよ、おどれよ、おどるぞ、踊らにやそんじや、おどるあほうに、見るあほう、おなじあほうなら、踊るがとくちや、お米もテウなら、私もテウテウ、チョイト〳〵〳〵

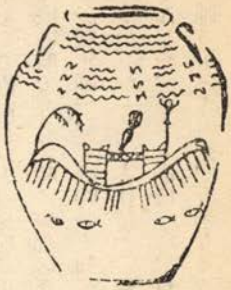
であつた。

此の踊りが、淀、伏見、大阪と各地に傳播し、如實に購買心を唆つて、踊りに着たり、叩いたり、振りまはしたりする道具で、呉服屋から、金物屋から、細工物屋までが大儲けをしたのである。

上方文化の東移

平安京と豐臣氏の築城の地大阪が、共に上方文化の發展を見家康が慶長年間任將軍、江戸に幕府を開いて後、上方文化の移行があり、江戸獨特の文化の生れたは少くも七八十年の後であり、川柳の前身前句附等も上方から移行したものたる事疑ふ者はない。

これも同じく番傘二月號に、岡田陽喜亭氏の「いろはぐら新柳樽」に就いて」の記事は面白く拜讀したが、その文中、大阪に於ても前句附が古くから流行してゐた事は、文政二年大阪心齋橋、高橋平助梓のもの以下種々の刊行を擧げ、又明和年間、大阪にも初代川柳に再敵する程の點者の存在を想像されてゐるが、これは前述の如く、前句附は上方が始まりであり、岡田三面子博士の岩波講座日本文學中の「川柳」中にも記載されてゐる如く、元祿十四年京阪板の來山點の前句なぞがある處から見ると、來山は大阪の道修町小西と云ふ藥種屋に生れ元祿時代知られた俳人で、その人が前句附の點者をしたのであるから、初代川柳なぞよりは古く、人物としても、劣らぬ人である。



川柳塔

路郎選

朝田新水

決斷の鈍き男を醉はしとき
漠然と退社の理由述べられる
ストツクが無くなつたとは棺桶屋
滿洲へ行つてしまへと無情なり
犬取りの今日の寒さの初仕事
孝行の爲めにおくれし戀なるに
いつのいつまで虛榮の白髮
食堂の同じ物をば殘すなり
收入のみちにかくもやあざけられ

住田亂耽

いざのむとなれば流石に離の人
富豪村道が眞直ぐ海へつき
凡そ不愉快な言葉に日本一
迎合を排してかたい敷布團

西宮京樂にて

酒徒として潤一郎の猪口の文字
街の蹬音をたのしむ靴の裏

洋君御出產を祝ふ

歌謠曲時代の赤ン坊の口
はかどらぬ絹ざしと妻の手をみつめ

西田艸樂

奥の方に住めば裏から雀が來
二三圓使ふていつも子を思ひ
君と僕の間にも一人俺がゐる
四五年ももう來納めと達者なり
どこへなと俺をば捨てに出て歩こ
きれいだと思ふ他の思ひなし

妻の留守にヂオゲネスを眞似て見た
もう一度たしかめて置きたく靴を穿き

山本丹路

お互に影を忘れてゐたりけり
冬の風景を我れより先にゆく男
やけざけでないが二つの眼がすはり
お店ぐらひ來て下さいが別れなり
愛の話題の斯くも少なく
戀ならなくに赤い財布が眼に殘り
ほろ酔ひのおまえは赤き菩薩さま
格に入り格を出でたる好々爺

吉田水車

食堂のイミテーションにじやれる蠅
マスク賣る人もマスクをつけてゐる
結極は今年も搾取されるのさ
鐵條網に似る冬の果樹園
押せば應へるいちま人形
山行けばうれし烏のあとやさき
百目では餘り五十目では足らず
バスガール誤告の多い日もあつて

楊井二南

理屈言ふつもり字引を借りに來る
つきあひの酒吊革をきしませる
アパートの規則の通り夜が冷え

洋君の誕生を祝す

男の子父は兎に角湯に出掛け
部屋中を煙に獨りまぎらせる
庖丁へたかゞのり卷一つ賣れ
いそがしと云ふはダンスのマダムにて

生田翠夢

逢ひ狀へあんたでしたかとは憎くし
ランデヴー奈良の旅籠の味も知り

或る有閑マダムに

うとましゆう春を身ごもり給ひけり
持參金俺には性が合はないぞ
なりわいのうたてやひとをかい抱く

阿部閑生

雪の凹みにわが家の煙出し
市電券一枚ねだり成の果
母今も子の天才を疑はず

醉ひ足らぬだけ神様の酒を借り
懷ろ手押されたゞけを押しかへし

橋本綠雨

貧しさと別に紋付着てすはり
遺言のやうに呼ばれて子は坐り
正月のお酒がこゝにも倒れて居
仕送りの子に賣上げの少なすぎ

永田里十九

椅子席へ座つて居るは女なり
眞ん中を歩けといふも親心
立退きの噂朝風呂賬はしし
みると又なつかしみあり五行本

大鶴喜由

○

ネクタイを換えバーを換へ戀を換え
嘘も本當も春の風〳〵
丸髷が搖れて走つた發車前
心身ともに腐れ果てゝいゝ着物

立會往診

患者を前に醫學的語で妥協
わが體にも修繕の時は來ぬ

鳴呼忠臣楠子之墓も春景色
月經帶で女心の一轉機

喜多春秋

どないもしやしまへんと犬好き犬を連れ歩るき
港の夜景タイトルの字が浮びさう
大阪だなアと川舟思はせる
子を泣かせといて家主へお茶をいれ
大きな匙ですくつてみたい山や家
マスクマスク中には鼻のないもある
浪曲は表に着いた駕籠一挺

水谷鮎美

眼にみへる生命のことを言ふてゐる
母ひとりほんとになきにきてくれる
バツトのけむりはがきを甫ひぬ
まごころへ物質上の損を言ふ
壁が歪めば砂をにぎつて見たり

吉田晩春氏の靈にささぐ

大空に消へゆく君はけむり
産聲に父朝の呼吸すひてあり

祝 藤澤白菊氏長女出生

首藤竹楓

自己陶醉冷たき薄團出して寢る
一寸來い昇給辭令舞ひ下る
蒼白き君の笑ひとなる月夜
惚れッぽい詩人の肩のうすッぺら
共稼ぎ影の長きを見て戻り

明石柳次

水くさい友大島を着てるなり
事務服を着た言葉とはなりぬ
三百六十五日責任額に追はれ
風邪聲を案じてくれる電話口
北風へ巡査としての手を擴げ

日野華水

雜巾を底に沈めて急な用
大阪だなあ橋を越え橋を越え
云ひ勝つた歸りの途のブルドック
案内をして來た山が霞んでる
煙草錢だけの夫を送り出し

姫田夕鐘

はたけちがひなれば笑ふてもおれる
雪道に恩師の先きを行くのなり
經木書きに招ねかれてゐる初大師
今時に珍らしい人だとかつがれる
逢狀のかゝる妓どもはかへしとき

北川あや美

病臥一ヶ月（二句）

家庭愛戀人までも忘れさせ
妻も子も無い幸せよ淋しさよ
腹立ちへ窓の硝子の水蒸氣
女給の手かじるお酒の醜態よ

平井春光

この邊で心を試めす管を卷き
朦朧の助手の瞳は鼠に似
何一つ出來ぬ令嗣の御結婚
復讐へ嫌な男の手を借りる
晝を寢る仕事と云へば見直され

西村明珠

挨拶の女同志に待たされる
勸めさへなければ二時が三時かて
座敷牢みたいに子供玩具とゐ

苦勞した話をすれば立ち上がり
菜をきざむ母の丸味は苦勞性　市塲浚食子

人目には幸福そうな後妻なり
先輩の誤解威嚇をしてかゝり
酒氣帶びてゐたばつかりに不利となり
そりかへる小柄の課長面白し
飲む方も食ふ方も人にまけてゐず　村田新市街

いんさんを秘めるに街の灯が暗し
大それた大望貧しさへ歸り
戀を知つた部屋のせまさを歩くなり
餅花へ行末をちつと見つめて
三百六十五日算盤の端をもらひ　後藤青兒

スケートへ女の風も吹いてくる
書留にまでして不平云ふ寒さ
貧乏を嘲けるやうに狆の舌
小使が名刺見返へす日は淋し

洋裝をしたが疊へ坐りたし
藥に負けて男寢てゐる
恩給と利子で足りない未亡人
元代議士の鉢卷や自作農　熊谷紅江戸みつる

有馬溫泉にて

吹雪今有馬は夢に包まれし
好奇心夜霧の街を歩いてゐ
未練とは船が出てゆく際なりき
此の次はキツト話すと女氣の　石森靜太

黑つぽい着物が似合ふ娘に惚れぬ
家族風呂男は痔せてゐてもよし
ぼくは、はいぴよう兵隊さんが竝んでゆく
K子へ

ひとり目覺めて靜太の頰がぬれてゐた　廣江天痴人

祝　亂笑、鹿之助兩君出生

かうなれば島根八束の酒の味

豐年だつた休みなさいと雪の量
掻き上げて雪六尺の底の葱
W・C凍る速さを書いて來た　岩崎柳路

秘書が藝者に紹介される馬鹿らしさ
別々の夢で寢てゐる老夫婦
貯金帳妻の稼も有がたし

此の頃の熱河

結氷のビールが割れる寒さなり　宮岡白峯

ライオンの如くマスク等笑ふなり
成功の出來ぬ十年目の話し
藥瓶藥價現金にて候　芝四葉

犬までがあまへる事を知つて居る

平價切下説へ

千圓に足らぬ貯金を心配し
木の陰に袂ゆれてる待つて居る　東谷開路

嵩のない男と生れ絹蒲團
嫁貰へ貰へと三十一となり
義理とは別に破産申告　竹内機見女

ビラをはぐ守衛へ雪が降りかゝり
手袋の白さへつりがきたないね
長生するが德だす白髪染　石曾根民郎

舊友に何はともあれ炬燵酒

父

何を出すかと思つたら老眼鏡
驚きに來てくれた汗おぼえとく　平井冬呼

佛心は惚れた男が七分持ち
方針は持たぬでもなし養はれ
電柱で女給の女房の歸り待ち
三時四時女給の妻の歸り來ず
賃仕事涙を捨てに冬の月　須崎豆秋

取り立てにゆく後家の紺足袋
勤續へ未だゐるのかいとはどうだ
咲く梅へ軍需工場の黑けむり

長谷川三汀

藝者ズラリちと高すぎる鼻もゐる
三年忌後家のタイプになつてゐる
お念佛湯呑みのお茶が出過ぎてる
集金人毛皮の衿もさびしけれ
折さげた手の冷たさを子に言はず

大西八歩

意見する自分の心ふと恐れ
元日の路に商ふ不幸せ
あぶれてる氣持も知らず道を聞き
寶塚草鞋で降りる人もあり
自制心いつそ淋しい雲となり
旅先で定紋に會ふなつかしさ

奥野禿山

名が少し賣れて氣になる過去のざま
そこまではいふなとまなこしばたゝき
あしらいは畑のものゝ實直さ

松下小柳子

雪ければ密柑の皮が出てきたり
もし死んだらと思ふ心のわきし崖

尼　綠之助

捕物のあつた小驛宵の口
すきあらば資本家としての腹となり

加藤文醉

何所も彼所も不景氣だよと餌を呉れ
物乞のことも氣にして病み給ふ
恩給を受取に行く髮を結ひ

渡邊曉童

吾が詩石槌山禮讃

釣船へ石槌おほいかかる樣
蔭口へ星がキレイに光つてた

荒井英賀夫

誘惑に女は來いと言はねども
握る戀指の白さを言はれたり

植山九天

奉祝皇嗣御降誕

團體の汽車におきばの無い國旗
居殘りと信ずる撞球は五十點
嘘ついて出れば正月きつい風
こしかけてめがねをふくも冬の汽車

越智虹子

風が欠伸をしたので春だつた
クツションのはねる大きい自尊心

石丸春峰

出世した時の話にして笑ひ
病妻に感謝をされた飯がこげ

毛利九波

過去の夢せめてカクテルだけが知る
人の世のこゝにも金が物を云ふ
戀をするなとは畫のお月様

梶谷巷二

馬鹿にされ馬鹿になつてる朧月

大阪にて(二句)

大阪に住んで居る氣の自動車屋
輕氣球煙りと同じ流れよう

中澤濁水

假橋を風は蛇の目の下を吹き
預かつれ植木朝晩氣をもませ
言ひ負けて油斷をさせる猪口を差し

大審院にて〇〇氏死刑確定

極樂で會はう昔の君であれ

妹尾變人

あきらめて居ても足音せまるやう
未亡人誰の爲への丸髷や
妻の持つ最後の手段のあはれさよ
おかしさはマスクを取つて笑ふなり

關本雅幽

物干しのパツチを覗く霰雪
損をすることも可笑しくなりにけり
ほがらかさ四角な顔へ强いられる
明日へ泣く人なら共に泣きませう
峯の雪十五の春のゆめごゝち

福田山雨樓

葬儀居が四五軒先に越して來て
妻の個性が刻む漬物
蓋のついたものばかりのある厨

路郎先生宅出産を祝して

本の山に埋れ四男五女が出來
子の頭父の愛からすつぽぬけ

日本名所名物川柳

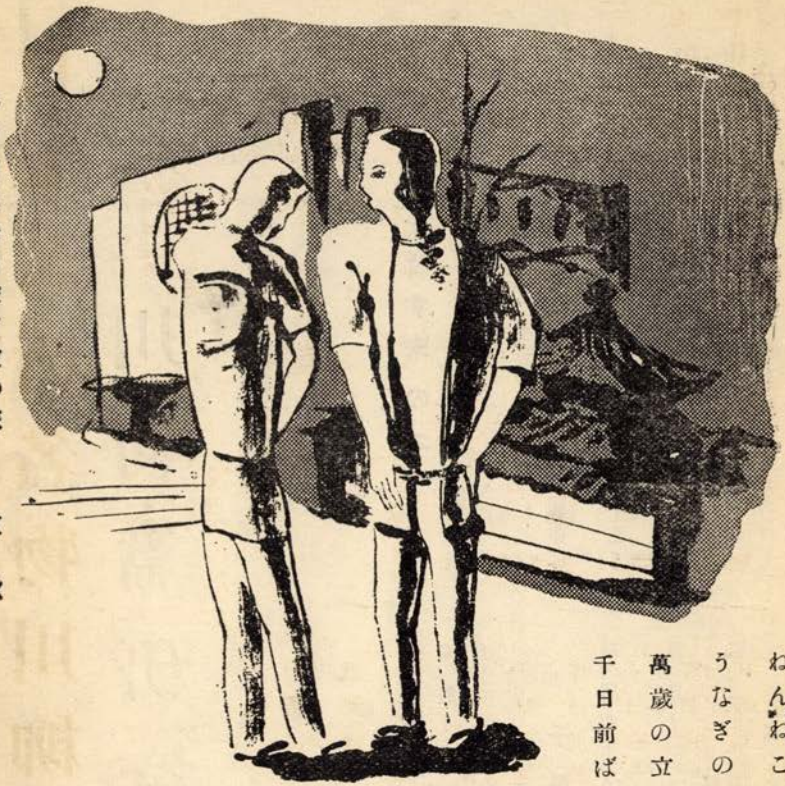
大阪の巻

麻生路郎選
大西長三郎畫

本欄は益々好評で既に道頓堀・大阪の夏祭四天王寺・ダム・築港・新世界・粟おこし・十日戎ご覧いてゐる。盛んに俳吟を投ぜられたい。（路郎）

（九）千日前

千日前綽名の顔で歩いてる　英
銀狐千日前は歩きません　九波
千日前横へ自轉車預けて來　あや美
千日前袂にぎつても居れず　曉童
千日前また一團が人を割り　愚堂
掏られたを冷やりと氣付く法善寺　桂枝
千日前ぽかんと男立つて居る　末廣
千日前東洋一が二ッ三ッ　彩泡
角帶は千日前へ喰ひに行き　掉二
歌舞伎座は千日前に格を付け　清美
千日の晝へ藝者は素顔見せ　一笑
千日前家主を聞けば寺を指し　春光
千日前連れは金など無いと云ふ　四葉
千日前芦邊倶樂部の上に雲　かほる
千日前きついゲームの人と撞き　亂耽
千日前呼止められて嘘を云ひ　山雨樓
死の知らせ千日前の木戸で聞き　同
歌舞伎座に首卷きつくまき直し　綠雨



千日前仁義を交す夜の底　豆秋

ねんねこの妻と千日前を出る　變人

うなぎのけむり千日前は宵　豆秋

萬歲の立見ワイフはいにたがり　ひろし

千日前ばくちに勝つて雪に會ひ　かほる

龍宮のやうに千日前の靄　亂耽

一づゝ抱いて千日前に居る　變人

大阪の巻

麻生路郎選

「大阪城」三句

三月三日締切

投吟先

本社事務所宛

武玉川初篇研究（三）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(658)

和尚の肝を咄す末の子

秋の屋＝不可解。

東魚＝末の子丈けは出家をさせなすつてはどうだ、自分が世話をしやうと云ふ樣な事を和尚が、不慮の夫の死にでも遇つた戦後家を説得する場合などが想像されはするが、甚だ曼東ない。

省二＝お説の如きかも知れぬ。肝は心である、考へであるから。

(659)

かくらおのこの細い衿元

省二＝神樂界丈けに、優さ型であらう。

秋の屋＝美貌の巫女を妻とする神樂師であるから、女のやうに衿元が細く白い。優男も有るであらう。

東魚＝神樂を奏する樂人の、烏帽子をきた衿元が、肩の張つた裝束に對して、わけて細くみられる。寫生的に出來上つた句だと思ふ。

(660)

千鳥は立て殘る赤椀

秋の屋＝千鳥の飛立つた川岸などに、朱塗の缺椀が只一つ、ふわり〳〵と浮いて居るといふのである。

東魚＝白きものに對して赤を配し、冬ざれの川岸の情景を描いたのであらう。

省二＝赤椀のういて來るのは風情がある。洗面器が沈むでゐたりしては、句にもならぬ。

(661) **埃りをはたく儒者の大聲**

秋の屋＝儒者が曝書をするとて、本箱の埃を拂ひながら、弟子達を指揮するといふ句ならむ。

東魚＝朗々と詩でも吟じそうな、斗酒も辭さぬやうな儒者の風格が想はれる。

省二＝儒者は概して大聲のやうな氣がする。

(662) **聟へ盃戻る横雲**

秋の屋＝結婚式の夜宴に、酒盃の献酬も終りに近づき、當夜の主人の聟の所へ、盃が戻つてくると、早くも横雲の棚引く黎明となる、と云ふので夫れより、倉皇として床入をするのである。

東魚＝前説にて盡きてゐる。

省二＝「横雲」にて夫れ程の含蓄ありとせば、巧みな次第だ

(663) **むかふ近江へ見せる稲妻**

省二＝むかふ近江であつて、働きある稲妻だ。

秋の屋＝廣大なる琵琶湖が聯想される。

東魚＝「むかふ近江」はうまい言葉だ。爽かな句。

(664) **道具屋に逢ふ若竹の道**

省二＝前句不明ゆゑ、事柄までは察せられぬが、若竹のある附近、風流人の住みそうな場所である。

秋の屋＝竹林に近い家に住む人が、道具屋に拂物でもする場合である歟。

東魚＝若竹の道は茶人の庵への一路、茶人へ何か堀出物を持込む道具屋であらう。

(665) **簞笥の多い鍛冶の六月**

秋の屋＝六月の炎天に土用干をする時、衣服を入れる簞笥の錠前や、金物の破損したのを、修繕する爲に鍛冶屋に遣るのである。

東魚＝異見なし。

省二＝「暮せはくらす六月の鍛冶」(ム十七)

(666) **明荷の馬へまわる金剛**

秋の屋＝金剛とは、俳優などの草履を取る供人で、旅行をする時に、主人は普通の馬に乘り、其供人は明荷を附けた、馬の尻に乘るといふ句である、此金剛の事は八文字屋本などに看えてゐる。

東魚＝俚言集覽に「金剛、京に歌舞伎芝居の中をはたらきてその日を送るものを金剛といふ(中略)金剛とは芝居役者に肩入奉公勤するせわ者」とあるから、前説は動かない處であるさすれば今云ふ男衆であらう。金剛の名は金剛草履などから、依て出來た名ではなからうかと想像される。

省二＝御想像の通り。常に金剛草履をはいてゐた處から、名附けられしと云ふ。

(667) **生延て子に呵らるゝつまみ喰**

省二＝女の年寄はよく摘み喰ひをするもの、それが又なんぼう樂しみなのでもある。(或は叱らるるも樂しみかもしれん)

秋の屋＝老いては子供に還へると云ふ俗諺がある。

東魚＝叱ると云ふものの、和やかな家庭風景である。

(668) **百日紅も通ひ路の數**

省二＝百日紅の咲いてゐる道を度々通るのであらう。無論

百日といふ數の關聯もつけてある。（もつと含蓄があるかもしれぬ。前句が欲しい）

秋の屋＝百日紅の百日が、女の許へ通ふ日數で、深草の少將よりも、一日多いのである。百日紅の下道を通ふのではなからう。

東　魚＝通ひ路にたま〳〵百日紅がある。百といふ字に心がひかれる、との心持ちであらう。

(669)

傾城に笑れに行主おもひ

省　二＝御主人の放蕩に、何んとかして思切つて貰ふよう、花魁に頼みにゆく。劇にある筋だ。

秋の屋＝鈴木主水の妻お安など、其例多くあり。

東　魚＝佐野治郎左衛門の治六が適例であらうか。

(670)

高尾か舌もまわる大年

省　二＝高尾でも大晦日を越すには、手練手管を振つた事であらう。

秋の屋＝實際に於ては、花魁は無言で、新造から無心をさせたものと云ふ。

東　魚＝高尾で第一流の花魁を表はしたのであらう。朗かな皮肉である。

(671)

西の河原を親の足早

秋の屋＝西の河原は、京都四條通の西壬生に近き地名で、「西院の河原」と書く。亦、山城國紀伊郡佐比に「佐比の河原」あり。早死したる小兒等が此處に集り、小石を積みて塔を造る、といふ俗傳の有るより、吾が子を失ひたる親は、其處をみるに忍びず、足早に過るといふのである。

東　魚＝前說の通りと思ふ。

省　二＝賽の河原、齊院の河原などとも書く。

(672)

頂戴したる若殿のうそ

秋の屋＝少年の若殿などが、其傳役に對して、其方に此刀を取らせると差出すを、有難く頂戴仕ると御禮を申上げたらば、それが虛言であつたと云ふのである。但刀には限らず、他の品物でも。

東　魚＝「頂戴したる」は「鮮かに一本參つた」と云ふやうな意味合ではないかと思ふ。まさか油斷してゐて、まんまと若殿にかつがれた場合であらう。

省　二＝物を頂戴するの頂戴の意に解してはゐた。

(673)

毒は廻りの早い借金

省　二＝かくして身の破滅に及ぶ。

秋の屋＝高利貸の茶毒最恐る可し。

東　魚＝言廻しが全く巧い。

(674)

地震の跡の箸も一本

省　二＝關東大震災の實情をよむだものの如き心地す。

秋の屋＝俗に箸一本も持たずに逃出すと云ふ。

東　魚＝石鼎氏に「秋風や模樣の違ふ皿二つ」と云ふのがある。それらより更に深刻な地震のあとの箸一本、まことに切に哀れが深い。

(675)

五人組から嫁を見始

秋の屋＝花嫁が町内の家々へ、附近に廻る時には、先づ五人組の家から始める故、其家の人が嫁の顏を看始る。

東　魚＝輕い穿ち味が、前句によつて、生彩を增してくるであらう。

省　二＝近所の數戸を一組として、取締上の單位としたのを五人組と稱す。（五人組もよむだ句に、「五人組迄詰る雨乞」ム十二）

(676)

白禿斗殘る飯臺

秋の屋＝「白禿」何とも解し難し。

東　魚＝シラクボと讀ませてある。俗に云ふシラクモ頭の事（俳字節用、合類節用、等參照）、大店の食事の時、番頭手代達のすんだあと、白禿頭の丁稚連中が飯臺を占領してゐる場合であらう。

省　二＝白禿瘡といふ。

(677)

我ほどの茂みの下に八から鉦

省　二＝叩鉦をいくつも躰につけ、叩きならして踊る歌說教の類（人倫訓蒙圖彙に繪解說あり）。八から鉦を叩いて茂の中をゆくの歟。

秋の屋＝八から鉦は路傍に薦を敷き、坐して鉦を叩き、行人の惠をうけたのも有つたやうであるから、此句は木立の茂みに坐して、鉦を叩くと云ふのであらう。

東　魚＝「我ほどの茂み」は巧い辭句だ。八から鉦に就ては「川柳詩」誌に書いた事がある。「八から鉦よく〳〵見れば手が二本」（柳樽廿一編）。八ツの鉦を叩く貌が想像される。「昔遠洲小夜の中山に此伎をするものある由」云々と俚言集覽にある。

(678)

かな聾に蛇骨掘まけ

省　二＝聾だから一心になつて、蛇骨を掘ると云ふ丈けにや

秋の屋＝蛇骨は有史以前に棲息した、動物の骨のことで、處々より發掘される。淺草北田原町に蛇骨の湯といふ有り、此湯屋にて井を穿へ時に蛇骨が出たと云ひ傳ふ。聾者が矻々として一心不亂に蛇骨を掘つた故、遂にそれを掘盡したと云ふのである。

東　魚＝蛇骨を掘當てやうと、互に先を爭つたが、根のいい外に氣を取られない聾に掘まけて、とう〳〵掘當られたと云ふ意にもとれる。

(679)

反から先へ習ふ鐘撞

秋の屋＝寺男などが鐘を撞き習ふのに、先づ後に身體を反す事を習ふのである。

東　魚＝でもあらう、と云ふので、本當に反る事を特に稽古すると云ふのではないと思ふ。

省　二＝上野の鐘をついてゐた人の話が、「文藝春秋」誌に載つてゐたが、やはり反る事が呼吸もので、それで鐘の音が違ふとあつたと記憶する。

(680)

ぬすみ課せて初のきのへ子

秋の屋＝淺草市から盗み來りし、大黑天の像を、翌年の初甲子に祀るといふ句である。

東　魚＝何となく可笑しさがわく。本當の可笑味とは、かう云ふ句に云ふべきだと思ふ。

省　二＝以て幸福な年が迎へ得られたわけか。

(681)

御仕着の下駄を親父に盗れる

省　二＝お仕着に頂いた下駄を、父が履いてしまふ。親子の情愛も窺える。

秋の屋＝小僧の藪入に、主人から貰つた下駄を、自分の親父に穿かれると云ふので、盗み取つてしまふのではない。

東　魚＝當人は夫程有難く思つてないのを、親父にしてみれば小僧風情に過ぎたものだ、己が穿かうと云ふ位の心持であ

らう。

(682) **鼻を大事にせいと遺言**

省 二＝鼻が落ちては世間の笑ひ物だ。遺言にまでされるとはたちの良い息子とは云へぬ。

秋の屋＝たとひ放蕩をするとも、毒に罹つて鼻を墮すまで深入りすなと、訓誡するのである。

東魚 奇拔な茶氣滿々な遺言だ。

(683) **馬も立派に歩行朔日**

東 魚＝月が明つて氣分の新たに緊張した趣、馬と流石に朗かに歩みを進める。恐らく登城の場合であらう。

秋の屋＝朔日の御禮に登城する。大小名の乘馬である。

省 二＝主人の禮服に對し、馬も堂々と歩む。

(684) **二心ないと思へは足の跡**

省 二＝戀のあだし心。

東 魚＝誰か他に忍んでくるやつがあるのかと、直ぐ氣を廻はすのも、戀する者の神經過敏な處である。

秋の屋＝疑心暗鬼を生じて、吾が足跡も他人の足跡にみえる

(685) **十月の空を見て居物貰**

東 魚＝小春の空を物貰ひが見てゐる。「麗さ頻りに錢が欲しくなり」の心地と同じ。

秋の屋＝小春日の麗かさに、着物の虱を捕つてゐる姿が聯想される。

省 二＝「出て遊ぶその氣を花の小春かな」(白二)の如く、物貰ひにも小春の自然の惠みはある。

(686) **冏兩にも藏はよいもの**

省 二＝藏に影法師のうつるのは、重厚味があり趣味的だ。障子に寫るのとは又違ふ。

東 魚＝同金屬の音でも小判は別けてよい、と云ふ心持ち。影法師でも流石に藏は豐かな氣分の影だ——裏に財物へ執着せぬ冷かに見た心境がうかゞはれる。

秋の屋＝金藏の白壁に映る影法師であらう。

(687) **鮓桶のきのふにけふは投出され**

東 魚＝一夜でなれた鮓桶の、今日は等閑にされてゐる。夏らしい一風景である。

秋の屋＝人情は斯うしたものである。

省 二＝拙家のお勝手口は、廣告や勸誘で求めた道具で、二度と使ひもせぬ樣なものが、棚に上せられてある。道具それ自身に對しては、氣の毒を感じもする。

(688) **付さしも七合入はちから業**

省 二＝付差の句前出。浮瀨には七人猩々の盃六升五合入、彼の有名な水鳥記の蜂龍杯は七合五勺入。これを傾け盡すには力業であるに相違ない。

東 魚＝廻しのみにする大盃も七合入は、全く力業であらう私は三合入をあほり付けた體驗はある。

秋の屋＝「力業」といふと腕力のやうであるが、努力といふ意であらう。

(689) **松明の手元てゝへる山かつら**

東 魚＝山かつらは山の端にかゝる、曉の雲をいふのであるから、夜道をして來た松明が、殘り少なく燃えつきかけた頃、

夜はあけそむると云ふ趣きであらう。

秋の屋＝長い〳〵山路を夜行して、漸く天明に近づき、手許の明るくなつた情景が窺はれる。

省　二＝巧みに言ひ現はした點は、學びたい。

(690)　**あたりの飯のすへるとふらい**

省　二＝あたりは近所。すへるは饐る。お葬式のため近所の御飯が餘つて、腐るといふ事は、實際にある。

東　魚＝大葬式であたり近所の會葬者には、强飯が供養に出る。又出立ちに振舞がある事もある。從て家の飯が殘る。尙吉原へ繰込んで居續けでもすれば、いよ〳〵だ。「飯がすへる」と奇拔に云つて、豪勢な葬式を連想させる處が、句の山であらう

秋の屋＝地方の豪農などの葬式に、多勢の村人がその家へゆき、而て飯を食ひ立てるのであらう。どうも江戸町人の葬式とは思はれぬ。

(691)　**江戸の餘波の山歸來呑**

東　魚＝奉願帳を廻はして近所のお蔭で、いよ〳〵草津の湯へ行く段取りになつた。江戸を明日立つ今夜、お名殘の山歸來をのむのであらう。

秋の屋＝必にもない剃髮染衣で、諸國の佛跡を順拜する例もある。

省　二＝適切な類吟があつたが、今思出さぬ。「山歸來たうとう江戸の水にあき」

(692)　**靑山からも近いよしわら**

省　二＝靑山と吉原間は　サテ何里あるであらうか。然し意馬猿心。千里も一里だ。

東　魚＝吉原行なら敢て遠しとしない。昔の靑山ときたら江戸の中心からは非常な遠い感じがしたであらう。今ならば「靑山も神宮以來近いとこ」とでも申すべきである。

秋の屋＝昔は靑山六道の辻などと云ふと、江戸の內とは思はなかつたのである。

(693)　**おとこの中にすたるうたゝ寢**

東　魚　男の中へ轉寢をするやうになつては、男から無關心にされては、女も哀れであると云ふ心持ちか。或はあつたら美しいのに男達の中に轉寢さして置くのは勿體ない、とあちに見た心持ちか。何れであらうか。

秋の屋＝「すたる」とあるから、既にすがれた女であつて、餘所目に哀れを感じるのである。

省　二＝男の中で轉寢する程では、すたつた女だ。結局すたつた女だから轉寢もなし得るのである。

(694)　**赤子の鼻を譽る座のしほ**

省　二＝しほは愛嬌。赤ン坊の鼻をほめるのは、確に當座のお世辭になる。

東　魚＝しほは機會の方の意であらう。

秋の屋＝お鼻はお父さんにそつくり、などと其場の時機に空譽めするのである。

(695)　**物にかゝりの突出しを買**

東　魚　突出しの花魁を揚げるとなると、大イしたかかりであつたであらう。其物入り合點で、敢て突出しを買つてみる好奇的の蕩兒の其のかかりを、へとも思はぬ氣分がうかがはれる

秋の屋＝「物にかゝり」といふ語は、多く食客に使用されるが此句のは前說の如く親懸りの放蕩兒である。

省　二＝初物喰は七十五日生き延びるといふから、耽奇心も出よう。

雜筆春秋

卵と鷄

佐藤しのぶ

Aは Bに川柳を敎へてやつた。川柳とはどんなものか知らないBは、Aの先輩らしい經驗と人格に大きな尊敬を拂つてゐた。所が半年程經つてBの句が句會に誌上に一句二句と拔かれ載せられて行くにつれてAの先輩らしい經驗が一々鼻につき出したのである。それは假令名前だけにしろAよりもずつと先輩の人々を句會に――誌上に知つて、それらの人々の語る柳論を散聞散見してすつかり共鳴したからである。Bからうとまれる原因をそれと知つてゐるAはそれがB自身に取つて一つの進歩であると想つて相變らず句會へ行動は共にしてゐた。すると急に折角ノビかけたBの句がバツタリと朽木を倒したやうに句會から誌上から沒し去られてしまつた。Bは焦燥した。しかしアセればアセル程駄目だつた。數多い世の川柳家達の中でもBの存在を知つてくれるものは一人もなかつた。ただAだけは、そうした事々にたへがたき罵りを受けながらもやさしく敎へる事を忘れなかつた。しかしAをうとんじてゐるBの耳には何の良心的反應もなくかへつて反抗心を起こさせるにすぎなかつた。その果は川柳を止めるのが落であるが決斷力のないBにはそれが出來ないらしく今でも折々子供のやうな句を作つてゐる。

去る日Aが私を訪ねて來てこんな話をして歸つた。私はこの話を聞いて非常に考へさせられた。と云ふのは少し違ふけれども私もAの樣な經驗を持つてゐるからである。私のは夜更をするとか、金をよく使ふとか、全く方面違ひの事を云つてさん〴〵困らされて揚句の果には前のBと同じやうに愚にもつかない理論を並べて私の下から放れて子供じみた句を作つてゐるのである。そこで私はAに云つた 卵が鷄に暖められて一人前になるやうに初心者も先輩に育てられて一人前になるんだ。云はば我々は川柳學校の一先生だ。だから君はBと云ふ生徒にイロハを敎へた。Bは初めは何も判らないから君の云ふ事に非常に敬服してゐたがだん〴〵日數のたつにつれてイロハにあきたらなくなつて上級の中學に憧れ始めたんだ。そして君から放れてしまつたんだが肝心の實力がないためにそんな事になつたのだ。順をふめば大學へでも行けるんだ。それを空想じみた向上心で自ら棒に振つてしまつたのだ。云はゞ自業自得さ君はBを人間だと思つてるのか。畜生だよそ奴は。だから畜生には畜生らしく相手になつてればいゝんだ。僕も君のやうにうとまれた揚句イヤ夜更しをする金を費ひすぎるとか云ふ見當違ひの苦情を云はれて弱つたんだ。初めの内は聞いてたが終には大人氣ないので默つてゐたのだまあ考へて見給へ自分で夜更をし金を使ふのを誰が責任を負ふものか。皆なその人間が惡いんだ。我々はそんな事にかまはずしつかりやらうじやないか。そうだ

やらう。A君は打つて變つた力強い聲でこう云つて歸つて行つた。

その後で私はしみ〴〵先輩なんてものはイヤなものだと思つた。うとまれるつまらない苦情を云はれる何一つ好い事がない。せめて川柳をやつてる嬉び――即ち恩を押賣りするんぢやないが自分が紹介した川柳を好いものだと感謝してくれたらなあと思ふ事がある。しかしそれも駄目だ。近頃よく世の初心者諸君よ。豪慢先輩川柳家を排して我等は手を組んで柳界のだらけた空氣を清算しようではないか、と云ふ力のない叫び聲を耳にする自分の無能さを暴露してゐるのを知らないのが憐だ。實力を養へと云ひ度い。つまらない事に時日を費して見ても實力のない叫び聲に何の反應もないのは當然の歸結である。

散る櫻物語

＝櫻に因んだ隱れたる傳說＝

加藤文醉

私は近頃仇討といふものに多分の興味を持つ樣になつた。ことに、風光明媚な遊覽地などに殘された仇討など見逃すことの出來ない私なのである。

○

美濃の大平野は麗らゝかに晴れてゐた太曾の巨流に沿ふて、成瀨公の居城白帝の天守閣は鬱蒼たる樹林の山上に巍然として聳え、遙かに惠那、駒ケ嶽、伊吹、多度の連峯を一眸に收めてゐた。本丸の南に、二の丸三の丸大手門は侍屋敷の間にある。東の侍屋敷の裏は、鄕瀨川堤、そこは櫻の滿開である。この犬山の城下に、不思議な辻斬がつゞけられた。その殺され方が皆一樣に、心臟を只一突にそれはあまり人に知られてゐない「合掌の突」であつた。この「合掌の突」の術は六感の働きで不意に敵に襲はれた時とか强敵を倒す最後の手段捨て身の術なのです。それを常用手段とするのは、武藝者仲間に解せない謎でありました。藩中の猛者が血眼で下手人を探し求めたが結果はいつも、手をむなしくして戻るのでした。櫻の花も散りかけて、一寸伸びた櫻の葉をクツキリと月が照らす夜でした。城下の刀屋、菊一文字で新刀を買ひ求めた小祿の八木左之助、なにげなく軒を出る鼻づらにピカリ、たしかに刀だ。「あつ！」と聲を出すまもなかつただらう。刀の柄に手をかける間もなく虛空をつかんで、のけぞつてしまつた　刀屋の店先にまだ居た、左之助の娘、美しいお葉が「あつお父上」お葉はその時、たしかにチヤリンと鍔鳴りをきいたのです。一瞬です。表に飛出したが人影はなかつた。左之助は右に刀箱を抱えたまゝ倒れてゐた。左の胸からは血がぶく〳〵と吹き出してゐた。血生臭い臭いがぶん〳〵と鼻をつきます。これは正しく「合掌の突」でやられたのです。お葉は流石に武士の娘であるだけに、はつきり「合掌の突」だと云ふ事を見てしまひました。でも女です、わな〳〵とふるえて、父の亡骸にすがりついてしまひました。「心弱うてはなるまい。仇敵討ちをせねば……」母から說き聞かされたお葉は、成瀨公、劍道指南役、蘭兵一衛門へ弟子入をし兵一

衛門の息で、美男の噂高い桐三郎に教えをうけたのはそれから間もない事です辻斬噂はそれからぱつたりと跡を斷ちました。江戸で浪人者を集めるとのこと、多分江戸にでも上つたのでせう。滿二ケ年の間熱心に稽古をしたお葉が、桐三郎に助太刀と云ふ名目で共に旅立することになつたのです。仇討！桐三郎、腕前のたしかな頼もしい、それに美男だ、その男と旅をする年若いお葉の血はわく〳〵します。お葉の心は仇討「合掌の突」を得手とする武士、それを手懸りとする、雲を摑む様なたよりない旅であるにもかゝわらず、新婚者のみが感づる、或る特別な樂しさみたいな心持で旅立つたのです。犬山から—宮—岡崎—濱松—仇討するものゝ總てがそうである様に東海道を江戸に指して上りました。名も知れず、見た事もない武士を探す、冷靜に考へれば馬鹿げた事です。けれど若い血に燃ゆる二人の旅は決して、淋しいものではありませんでした。雲助や道中師は桐三郎の腕と刀で見事に難を避けました。山坂の難路は桐三郎がお葉の手をとつて助けました。こうしてゐるうちに、二人の仲はもう愛弟子と劍法の師と云ふだけの形式ではすみませんでした。若い女と男、それはどこにもある型です。こうして旅をつゞける間に、月日はとめどなく流れます。一年、二年、三年目の櫻咲く頃、二人は又郷里犬山の城下に姿を見せました。それは又犬山に、辻斬のあるらしい噂を耳にしたからです。郷瀬川の堤には櫻が眞盛りでした。—櫻の樹影に虚空を摑んで倒れた父の最後、丁度櫻がこんなに盛り頃だつた。お葉の心は追想に限りがなかつた。桐三郎に武藝を指導されてから二年、旅に出て三年、初めは樂しかつたが、今は憂鬱と退屈に馴れた旅（二人には、たしかに倦惰期が來たのです）郷瀬川堤の櫻がハラ〳〵と散りました。大きな老櫻。櫻の枝からつーと一疋の毛虫が糸を引いて桐三郎の眼前に「あつ毛虫ッ」桐三郎の右手が動いたかと思ふと眞ッすぐに何かピカリと光る「あつ」お葉の前につき出された切ッ尖。「合掌の突」なんです。お葉は見てならないものを見てしまひました。もしお葉に武藝の心得がなかつたら。お葉は巧みに切尖を除けたのです。桐三郎は刀を櫻樹に先たてたまゝ、こめかみはビリ〳〵動き、片足はワナ〳〵と震えてゐた。「合掌の突」お葉の頭にピンと響きます「桐三郎様だ、父上を殺したのは」お葉は直感したのです助太刀に永い間、樂しく共に旅をした美男の桐三郎、「父の仇」いまなら討てるがどうした事だ。お葉は桐三郎を介抱しなければならなかつたのです。翌朝、木曾の巨流の川岸に櫻吹雪をあびながら刺し違えた若い武士と女がありました。その死體の上をムズ〳〵と匐ひのぼる、毛虫一匹。桐三郎は、毛虫恐怖患者だつたのです。（完）

「街の灯」と Senryumi

毛利九波

權利金の問題とかでかなりいざこざのあつたチヤツプリンの街の灯が漸く銀幕

に現れた。三週以上の續映と聞くが勿論始めからの豫告があつたとしても好評の爲め續映なんてことは及びもつかない。成程チヤツプリンの名と巧妙な宣傳によるドラウイングパワーはあるとしても映畫通の批評及一般の噂はあまり好い映畫だと云はない。製作されたのが一九三〇年頃と聞く我々はそれ迄幾多のトーキーとして優れた作品を見慣れた故か映畫全體として受ける感が既に古いといふ印象だつた、それにサウンドも不完全だしカツテイングもギヤグも全てが古い、使ひ古された隨所のギヤグに新鮮味はない、河へ二度落ちたり宴會の失策振、拳闘のシーン等成程笑聲は起つてゐるが私達の眼には何の興味も起らずむしろチヤツプリンの爲に悲しく思つた。製作された年を勿論頭に入れてはゐるが彼のギヤグは老人小供を笑はす以外の何物でもないと思つた。しかし彼の映畫には所謂チヤツプリンの人生哲學。主題を流れる人間味ほがらかな浮浪者も矢張り戀と富の前には如何することも出來なかつた、それこそ人間として誰しもが持つ苦惱と寂寥こそ人間の眞實の姿でなくて何であらふ、人生の笑ひの裏の哀愁、ユーモラスな場面が亦彼の哀愁だつた云へるのだらふ、殊に赤裸々な哀愁を見せた盲目の花賣娘との最初の邂逅、彼女が彼を富豪と誤信するあたりの伏線の巧さとラストシーンのチヤツプリンの涙を秘めたクローズアツプ等誰もが純情なルンペンの涙を見逃さなかつただらふ。彼の持つ可笑みの裏の哀愁こそ私は川柳的な方面と結びつけたかつた。チヤツプリン映畫と川柳味、笑と涙のハーモニイこそ川柳的な響でないとどうして云へよう。私は映畫的には街の灯の期待は充分失つたが現在私が柳界の儚なき存在にあることによつて彼の映畫と川柳を結び作句上ある別の道を開拓して呉れたことを信じ決して失望しなかつたことを喜んでゐる、聞けばチヤツプリンはトーキーを好まずこの映畫も彼がトーキーに對する挑戰否揶揄と云ふ好漢チヤツプリンがその點迄何處が川柳人的な風貌が無いだらうかと私は思ふ。とあれ巴里の女性の如き映畫を期待するもの僕一人で無いことを信じてペンをおく

「浮浪者に明日の望みの白い花」

雀

岡田　某人

裏が教會で幼稚園でもあり、おきまりのポプラーが二三本、讃美歌や童謡と入代りにそれこそ　その二三本に鈴なり、チーチーパパどころではないヂクヂクヂヤーヂヤーなんだ、大きな凸レンズをあてがつたら、立所に燒鳥屋が開業出來るがなあと、自分でも唾をのみこみ、時折遊びに來る太つた連中に、いよう燒鳥君と親愛こめて呼んだりしてゐたのだが一週間程前に何と思つたかそのポプラーが皆伐られてしまつた。愉しい彼等の集合所を奪つて、それではキリスト樣にすむめえがと義憤を感じる一方、當分この圓頭の燒鳥諸君とも疎遠かと思ふといつそその方がつらいのである。

これ雀おまへ燒けたらなんぼする

川柳天神縁起（三）

藤里好古

（四）吉野行幸供奉

寛平二年の二月、讃岐守の任滿ちて歸京、翌三年二月東宮侍讀となり。同年三月九日式部少輔に、同月廿九日藏人頭となりて、式部少輔を兼任、續いて四月十一日左中辨をも兼任す。と云ふ榮達振りで昌泰元年には、權大言右大將となつて居た。此の年十月廿一日、宇多上皇御鷹狩に扈從す。同行供奉の面々は、是貞親王、源昇、藤原清經、在原友于、源善、藤原春仁、藤原恒佐、藤原如道、源敏相等の月卿雲客、小童下部を通算して九千餘人の同列、淀、美豆野、交野、を逍遙して旅宿に留幸され。廿二日は山城國綴喜郡、何某しの古院に留幸、大和に向せらるゝことゝなつた。

廿三日、早朝御進發、大和法華寺に御參詣、石上の良因寺に在る、僧正遍照の子素性法師を御招請になり、同列に加へ給ふた。特に勅して、寺名により良因朝臣と呼ばせられた。かくして、詩人道眞と歌人の法師とを左右に隨へさせられて御鷹狩、如何にも興趣饒かな御幸だつた。

此日、古の奈良坂なる今の歌姫越の峠に在つた、道祖神に手向すべく、道眞は、

このたびはぬさもとりあへず手向山
紅葉のにしき神のまに〳〵

と詠じ、素性法師が是に和して、

手向にはつゞりの袖もきるべきに
もみぢにあける神やかへさむ

と詠じたのである。此の道眞の和歌が、「百人一首」に採錄されたのだ。今日、奈良東大寺の鎭守だつた。三月堂畔の八幡宮は、其名も手向山八幡宮と稱し、其時の道眞が腰を下したと云ふ、菅公腰掛石と云ふのがあるが、何れも與太ものなのだ。旅行の途次、道祖神を拜するには馬上からするのが、古い習慣なのだから腰掛石などのあらう筈が無いのだ。此の時の情況、此の時の和歌を追憶して詠んだ句が、

取あへず御歌を幣の手向山、
言の葉の錦を幣に手向やま、

であつて、是等の手向山は地名ではなく山に手向けたと云ふ意味なのである。

かくして、其夜は高市郡畝傍山の西南今の新澤村天神山の麓に在つた、道眞の山莊に御留幸。廿四日早朝に御進發、吉野山麓の宮瀧に在つた「吉野郊院」に入らせられ。廿五、六日は附近の勝景を御遊觀。廿七日御進發、廿八日龍田山を經て河内國に進ませられ。三十日、攝津國住吉神社に御參拜。十一月朔日、朱雀院へ還御になつたのである。此の行幸に供奉した事が、左迂直前に於ける道眞の大旅行なのだ。

翌二年二月十四日に内覽の容示を蒙り右大臣に進み、藤原時平左大臣に進み、兩者對立し、漸く禍機至らんとするのであつた。

(四) 危機至る

海内唯一の政閥藤原氏と、廟堂に對立し國政を議することは、門地底き儒林の出身たる道眞に取つては大なる危險があつた。そこで、神經質な彼は同年二月廿七日、右大臣職を辭するの表を奉りしが、在原友于を勅使として翌廿八日勅許なき旨傳へられ。續いて三月四日に上表せしが即日返表され。同月廿八日三度び上表拜辭したが、是れ亦、勅許なく、此のアバンチュールな地位に止まるのやむなきに至つた。「續古事談」が

首尾ワヅカニ九ケ年ノアヒダニ、讃岐守ヨリ右大臣、内覽ノ臣マデカ、シタテマツリ給ヒタリ

と驚ける如き、昇進振りだつた。いかでか政敵藤原氏一門が靜視しやうか、禍機漸く至らんとする時しも、其の秋十月廿四日、宇多上皇は御落飾、仁和寺に移らせられ。女御菅原衍子（道眞の女）も落飾した、是の事が道眞の心境を愈々焦操せしめたのであつた。そこで十一月五日上表して、右大臣の職封一千戸を減ぜんことを請ふた。此の減給の願は勿論入られなかつたが、權勢を誇れる時平の感情を害することが少なくはなかつたのだ。こゝに於て顯門の貴公子時平と、所謂る成り上り者道眞との感情は沮害し、政見は悉く疎隔するに至つた。かゝる雰圍氣の裡にタイムは流れて、翌三年正月三日となつた。

此の日、宇多法皇は朱雀院へ朝觀行幸あり。醍醐天皇と御密談、右大臣道眞を召されて、政務は汝一人に委任せらるべきよし、仰せ渡されしが固く拜辭せり。然るに是れを側聞せる左大臣時平は心よしとせず

よく書くか好かぬ手風と時平いひ。

と、道眞嫌惡の念は高潮し來り。

惡筆がよつて筑紫へやる工面

と、事を構へんと謀りつゝ其秋に至るや十月十一日、三善清行は道眞に書を送りて、彗星の天妖と云ひ、明歲は辛酉革命の歲なれば、正に天道革命の運に在り。良友同志之契として、辭任其難を避けよと云ふ。されど神經質者の常として、其の諫言も誹謗の聲として受託せざりき。かくして嵐の前の靜寂を保つて、其年は暮れた。

明くれば、昌泰四年元旦、日食にて廢朝、續いて十五六兩日、月食あり。清行の辛酉革命、天道革命說は信ぜられ、妖殃や至らんと大衆は戰慄した。此の機乘すべしと心密かに嬉んだのは時平一門の者共だつた。こゝに於て、

しやうぐ〳〵な御身をけがす時の難。

は發生し、宇多法皇の第三皇子、齋世親

王の妃が道眞の女であるから、道眞は親王を御位に付け奉らむ。との密謀を有せりと讒したのであつた。こゝに於いて、同月廿五日、太宰員外師に左遷の宣命が降り。嫡男高視以下の四子悉く配流となり。父子一時に五處に離るゝ慘事に直面するに至つたのだ。此の日、仁和寺に走りて、法皇に、

流れゆくわれは水屑と成りぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ。

との一首を奉りて哀訴した。憐れを催された法皇は參內助命せんと、御車を進められしが、

隱居が來てもあけるなと時平いひ。

と下知されしにや、諸陣の警衛嚴しくして參內叶はず、止むなく侍從所西門外に草座を敷き、終日御座されしも紀朝臣長谷雄門前の警衛にあり、火長以下衞士床机より下らず無禮の行ひあり。晚景に至つてむなしく還御になつた。こゝに於て道眞の唯一の輔けの綱は切れ果てたのである。

菅公この度びは筑紫だなと時平云ひ。と、政敵時平は喜び勇んだが、「神皇正統記」の著者北畠親房が

「御幼年のゆゑにや、左相の讒にも迷はせ給けん。聖も賢も一失はあるべきにこそ」と云へる如く、

よいお手を反古にしたのは延喜帝。だと云はねばならむのだ。然れば、

延喜帝鈹にまぐはを是となされ。

たのは、如何なる御心境によるか。そは西田直養が「左遷考」中に云へる如く、所謂先代よりの古參番頭は若き主人の快よしとさせる。心理より此の御一失は發生したのである。

時平は文、景時は武を讒し。

—昭九、二、一三稿、次回は、「道眞落飾」、左遷路」を說かむとす—

粒々集

舞鶴　安川久流美

飛行機でない鳶が舞ふ要塞地
川べりの橋から橋へ思ふこと
長靴を穿いた子を伴れ父なるか
田舍落ち少うし蓄める氣で暮す

大阪　長谷川一徹

映畫では貧に味方のストーリー
起きて來て花咲輕くあくび見せ
高齡の事と今年の紙治も觀
パン包ませ男立ち居り騷音の街

松山　前田五健

間違のまゝ朗かに本讀む子
吳服祭七夕さまに似た飾り
日本刀こう構へたら何とする
春めいて來ました閑も金もなし
太古から田螺はスローモーションさ

御影　長崎柳秀

初戀を妻に話せる年になり
病み乍ら小言の過ぎる父の床
引揚の駄賃と云ふがマツチなり
月收でとてもと思ふオーバを着
思うだけ積めと馬の眼横を向き
久々の夢に會ふたに彼女病み

江戸のうはさ

▼雀郎氏の親類に當年四才とかで素晴しく達筆の子がゐるので玉兎朗氏「東念寺の額を所望した所が、程經てこのこどもしが雀郎居へ持ち込んだのは、禊大に「東念寺」と墨痕淋漓とした大物、それに之を持つて來た時の文句がいゝ。「はい、お寺さんのが出來ましたよ。」

之をきいた鐵之助親分、腕を拱いて「東念寺の本堂はまだ建ち上られえ。」

▼私が陣居氏へおくつた「潮騷」が偶然同氏の母堂のお通夜の席へとゞいたさうで不思議な心のつながりだと思ふ。通夜の第一夜は柳友會の一味が詰めかけられ、第二夜には柳談會の諸氏から多數の悼句を捧げられた。陣居氏の句に曰く。「四十年母とくらして淡まれ。」

尙ほ同氏のたよりに「御承知の巨大漢もたゞに感傷的と相成云々」とあり、御力落しのさまが充分以上にうかゞへる。同氏の健康を祈るや切。

▼一月二十九日の柳談會は劍花坊、久良伎兩翁も出席され一段と賑かで、新橋の元名妓小ゑんの話を、速記者花戀坊氏の勞を煩はしてきかれたが、川柳家が余りに達辯揃ひなので充分その効果が上らなかつたときく。殘念！

この席上で、品川の會長「きやり」の放醉漫談について今後自分の態度を改めることを誓はれた由。遠波樓なるもの以て冥すべし。

▼番傘二月號に於て、陽氣亭氏「江戸柳壇と涙花柳壇の握手」なる一文をものされ、眞摯な研究的態度は感服するが、その中に「川柳雜誌東京支部開設記念句會」といふ事を書れてゐるが、與太も甚だしい。本社に於て、東京で支部開設記念句會をひらいた覺へ更になし。

古書研究も結構だが、同時に現代の川柳雜誌も大きな目を開けてよんでもらいたいものだ。

▼建國祭に日本精神の間接運動として「梅酒」飲用祝賀の宣傳をされ、丸山鶴吉氏に第一共鳴を得られた由、鞍馬氏より便りあり。

▼2月11日、雀の子改め宮士郎主催で、故飴ン坊一周忌句會西念寺で催さる。文象、玉兎郎、太郎丸、三太郎、迷亭、劍花坊、雀郎、しげを、青風、荷十、茶六、琴莊、玄六、壽山、紅太郎、新蟬、丘翁、犇郎、青蛾、米花、三當史、山門等出席さる。出來上つた墓石は相當のもので玉垣も出來堂々たるものださうで、玉兎朗畵伯が傑作「墓石の圖」をものしてこられたが皆樣に、この欄でお目に掛け得ないのを深く遺憾とする。尙ほ之に寄附された各地の方へよろしく御傳へを願ふといふ事である。

▼4月3日には、きやり十五周年記念句會が大々的に催される本社からも、大勢今の所お祝ひに出かける豫定である。地方の方々も、多數「きやり」の爲に出席されたいものだ。

雀郎と壽山共演の珍舞踊「獅子舞」といふ餘興が若し見られでもしたら、嬉しき限りだがとひそかに期待してゐる。

とにかく4月の「きやり句會」は宛然全國大會の壯觀を呈するであらう。交驩の實も從つて大いに擧るであらう事を祈る。

▼メモ二月號に、尾山兎耳氏の川柳二頁にわたつて收載さる。尙ほ品川陣居又の名糸井武雄氏「枯野紀行」を同誌に執筆されてゐる。（亂耽）

駈引

住田亂耽選

駈引のない若旦那飲む話　曉祥月
駈引と知らず財布の紐をとき　一丁路
一應はおこつて夜店仕舞ひ込み　錦城子
駈引のとぼけることもおしへられ　新水
駈引へ男の意地を通すなり　山月
駈引の押問答にドアをあけ　紅
負けておく植木一枚棄をむしり　靜波
駈引はまからぬものをまけるなり　柳志
紙芝居身の入る頃に飴を賣り　春光
ちゝはゝへ別々に出す無心狀　史郎
駈引へコンガラガツテ居る電波　輝親
駈引が首尾よくいつた酒をのみ　寒草
長煙管から駈引が出る　曉童
駈引と知つてゐながらだまされる　美津女
まだまける〻早や妻の手が動き　健二
駈引の下手な外交愛される　九波
駈引を黑い眼鏡に言ひ損じ　明珠
パンにつられて駈引についてゆく　錦石
駈引と別に醉ふ日を持つてゐる　笑寺鬼
駈引が首をまげてる植木鉢　華水
すみ切つた空駈引を忘れてた　波樓
駈引のないところでと言ふ値段　春峰
駈引を知らぬ悴の齒痒くて　菊路
駈引のうまい親父が顏を出し　四葉
駈引の肚を列車の中できめ　宵明
駈引も出來て年期も近くなり　晨一郎
駈引をするに電氣が明かすぎる　同
駈引を大びらにいふ事務所の火　同
駈引もいつかおぼへたひげをそる　同
協定と言ふ名で色目つはかれる　利生
候補者逆宣傳もやつてみる　同
駈引のしびれが切れた絹蒲團　たけを
駈引へ茶柱立つたお茶を入れ　同

五客

Nishincho MEMO

雨綠

▼別項社告の通り毛利九波君が同人として入社されました、今後活躍を祈ります。住所は大阪市東區道修町五丁目三四吉田方

▼本社伯耆支部が新設されました、幹事は鳥取縣西伯郡手間村湯原美笑君です、活躍を祈ります。

▼建國祭に因んで二月十一日の夜「二千六百年前の大阪」といふ座談會をBK第二放送で路耶先生の外涙高の天坊教授、趣味の考古學會の八木博氏三高の藤田教授、史談會長江崎政忠氏等で放送されました。

尙、路耶先生は三月二日にBKから趣味的なものを放送されることになつてゐるさうです。これにはウンと川柳が飛び出すことゝ思ひます。

▼本社同人座談會を二月十日夜本社倶樂部で開催致しました。出席者は路耶先生、閑生、

駈引の番頭拜むばかりなり　白嶺
駈引を腹でわらつて酌をうけ　春光
駈引の顏に六十年の皺　青兒
駈引の弱い商賣ですと云ひ　春秋
切札は別に殘して話し合ひ　利生
人
駈引の後めたさによく喋り　默紅
地
言ふただけ出されて怖い手切金　紅

膝

華水選

膝の子は一錢握つたまゝ寢てる　末廣
膝なぜてなぜて、それが嘘を云ひ　丁路
談判が激しくなつて膝が浮き　禿山
つゝましく坐つた膝の詩集なり　蛇之助
笑顏よし母の膝から父の膝　明珠
膝に手を重ねて養子の身分なり　朝雨
畦に憩へば膝のつぼ目に日が當り　鴉天
男の子お膝の上でおさまらず　菊路
宴會の膝がくづれて藝となり　祥月
疑へば女は俺の膝へ泣き　九文錢
膝だいて午後の陽ざしゐる空想　竹雅

天選後に

駈引を大阪の孫心得る　葉光

駈引には、(一)機を見て行ふ處置、(二)軍の進退、(三)商取引に機を見て行ふ取計。商略と言ふ三つの意義がある事は、諸氏充分御承知の筈ではあらうが、この度の集句は殆んど第三の意義のものばかりであつた。私はもつと區を廣義に解釋して作句して貰ひたかつた。

日野華水
須崎豆秋　共選

ふるさとの疊へ延ばす春の膝　紅
膝組んで話題をかへる酒を酌ぎ　葉光
看護婦の膝をすべつた主婦の友　小樓
膝までの水へ鮠は深く住み　史郎
改心の涙を膝に見つけたり　春峰
膝立てゝ思案に餘る壁の色　三八郎
反省してキチンと座りかへてゐる　元山
案外の話に膝がにぢり寄り　たけを
母親の膝へ來ると藝が出來　同
子の笑顏膝から膝へつゞくなり　ライト
黃昏の膝へ子供を持つて來る　同
膝を叩いて盲人の獨り言　淋し
春秋

山雨樓、亂耽、丹路、新水、かほる、紀太、翠夢、艸樂、里十九、夕鐘、禿山、華水、幸捐、喜由、沒食子、勇、春光、九波、柳次、の諸君と私の二十二名で頗ぶる賑やかな會合でした。

▼庄萬よし、安井ひろしの兩君は二日十二日城崎スキー場で初スキーに行つて轉ぶことに汗だくになつて歸られました。

▼大西八步君は二月五日から商用で雪の山陰地方へ出張されて石見濱田港の油屋旅館から小唄をものして送られました。

▼江戸みつる君は歸奉の途中大連で大島濤明、廣瀨三碧兩君に會つて久し振りの快談をされたさうです。

▼越中今雨君は一月二十六日目出度華燭の典を擧げられました。

▼岡本一瓢君は一月廿六日深谷鑛泉、二月十九日山代溫泉で遊はれました。

▼藤澤白菊君は一月十二日目出度長女道子さんを儲けられましたお喜び申し上げます。

▼金澤から活文堂川柳會が創立され一月に第一回の句會を催されました。

▼宮城啞亭君は「宮津みなと音頭」を新作され、ニットレコードに吹込みされました

▼松田青風畵伯の肉筆短册頒布會を催され

出す簞笥しまふ簞笥へ膝で立ち　同
作法室膝を並べてしんとする　朱郎
葉牡丹を生けて見直す膝となり　同
膝まるふ〳〵キチンと十八九　喜由
踏みしめる力も嬉し母の膝　同
佳吟

浮世繪の膝を見てゐる美少年　冬呼
歌麿の筆の跡、立たづめる美少年、實に好一對、その膝に動ける筆の力は……
元利共返して膝をちとくずし　笑寺鬼
恩は恩、義理は義理、そのけじめを知つて居る人ぞ奥深し。
膝枕日本一の兒の寢顏　宵明
「三千世界に子を持つた親の心は皆一つ」ちつゝ見入る親の睦には、何時しか嬉し涙が湧いて居る。その涙がいとし兒の寢顏へポトリ。

◇　豆秋選

思ひきり拗ねてやるなりまるい膝　野郎
洋服は御免と膝を崩らせる　山月
黄昏の膝へ子供を持つて來る　ライト
膝なぜてなぜてそれから嘘を言ひ　丁路
結婚の適齢期をば膝に見せ　いの助
膝頭抱けば時計も泣く如し　岩石
膝の丸みへポツクスの夜は更ける　花涙
看護婦の膝をすべつた主婦の友　小樓
膝一つ五燭の下に抱いてゐる　輝親
過去にふれ女給は膝へ手をおぬ　貴代志
恐縮の姿膝から腕が伸び　昨夕
泣いた子を膝へ上げたり下ろし　九文錢
苦勞人フト膝を打つ癖があり　春峰
膝に手を重ね養子の身分なり　朝雨
滿員の電車が搖つた膝と膝　禿山
膝へ來るいがくり頭撫でゝやる　虹子
うたゝ寢の乘換券が膝に落ち　寒草
膝の子は一錢握つたまゝ寢てる　末廣
洋裝の膝があまり冷たすぎ　芳岸
つゝましく坐つた膝の詩集なり　蛇之助
膝組んで眞晝の酒が美味いなり　葉光
母の膝小さく照し夜業の灯　鴉天
立膝になつて話がまたつゞき　健二
膝と膝男へせまる義理があり　九波
裸婦の像膝ピツタリと合ふてゐる　正夫
もう膝を立てたい時に謠が出　錦石
男の子お膝の上でおさまらず　菊路
說教の膝へ小猫の大それた　史郎
錦繪の夢を秘めてる膝の線　朱郎
出來心でした膝坊主なでゝゐる　波樓

ます、希望者は東京市小石川區關口臺町二十六番地松田青風後援會へ御申込下さい。

▼螢ヶ池支部二月例會、日本大學川柳會から寄せ書を頂きました。

▼品川陣居君の母堂が一月二十八日永眠されました哀悼の意を表します。

▼吉田晩春君は鄕里和歌山で靜養中一月十七日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼私の愚妻外喜二月七日から大阪帝大病院へ肋膜で入院致しました、入院に際して同院の長崎柳秀、井上湧三の兩博士に多大なる御世話になつてゐます、厚く御禮申上げます。尙路郎先生、鶴峰、山雨樓、機見女の諸君が御見舞下されました事は感謝に堪へません

▼本號の編輯は山雨樓、鶴峰、豆秋、雅幽、九波、機見女の諸君と私とで致しました。

轉居

▼山本丹治君大阪市住吉區住吉町帝塚山中二丁目三八（町名變更）

正誤

前號六頁
秋うらら。カインの裔で大地主　默紅

禪僧の悟りに膝も手拇なり　柳夢
サラリーに縋る兩手は膝につき　春光
案外の話に膝がにぢり寄りたけを
膝頭はつきり見せて父はやせ利生
催促をすれば瞳は膝に落ち　青兒
模範職工の膝が破れてる白嶺
夏蜜柑膝に一つの日向ぼこ冬呼
膝枕男の鼻の線を見る喜由
許されてきまりが悪い膝頭明珠
雜談の膝人格を少し下げ　新市街
母の無い子の膝が戀しい宵明
膝に手を重ねて主人膳へ付き　三汀
かしこまる膝のあたりのさびてく　錦城子

佳吟

體操に膝の曲らぬ父であり　朴甫
膝抱いて火なき火鉢を見まもゝ　曉童
膝をひろげて、圓タクに乘り　紅
手を添へて女は膝を崩したり　四葉
膝立てゝ思案に餘る壁の色　三八朗
膝割つてきて本心にふれさせず　竹雅
大佛の膝が光つていゝ月夜　笑寺鬼
呉服屋の帶一本を賣つた膝　春秋

川柳書架（五一）

川柳家庭行事

渡邊虹衣著

▼その「はしがき」の一節を拔くと

年中行事とは、いふまでもなく元旦より除夜に至るまでの慣例儀典等を錄したものであるが、此年中行事にも社會一般に行はれるものと、然らざるものとがあり、又期日等も、その年に隨つて一定して居ないものもある。（中略）本書は現在の家庭に於ける行事を主とし、これを叙するに初代川柳翁の撰になる誹風柳多留、並に誹風柳多留拾遺の内に收められた句を以つてし、尙又現代に於て新らしく制定され、若くは創始された諸儀式、並に慣例に就いては古川柳句のなき儘、著作自作の句を以つて充てる事とした。

昭和七年初春　天王寺上之宮の寓居にて　虹衣生

（以下略）

▼昭和七年一月二十日發行。四六版五六一頁。定價金貳圓五拾錢、大阪市東區淡路町三丁目文友堂發行。

▼著者渡邊虹衣氏は古川柳研究家として知られてゐる。

社告

今回毛利九波君が同人として入社されました。

七　頁　凡夫さかしく富士を描きぬ　夜王
八　頁　芝居裏八卦並んで更けてゆく　栞
九　頁　年の暮カフェーに醉ふひまがあり　菊路
十七頁一頁　風邪引へ冬の夜あつけなく暮れる　春海
二十七頁　とは知らず社長女工に席讓り　閑生
四十一頁　いさゝかな儲けに善人うたへて　八歩
四十八頁　戸籍調（356）内の句
何時見ても富士は日本へ物を言ひ　人
四十九頁　同（356）は伊藤道浦
五十二頁　寢顏よ父ちやんは今歸つたんだよ　冷

社章交附（二回）

（カットは執筆原す）

本社の同人、並に支部幹事諸君に左の番號の社章をお渡し致しました。

雨迷（43）、汀柳（44）、角丸（45）、新市街（46）、おさむ（47）、啞人（48）、九天（49）、柳路（50）、文醉（101）、冬呼（102）、光路（103）、鐵洲（104）、稔（105）、九波（106）、（以上洋服用）虹子（71）、聞路（72）、（以上和服用）

月評

金★銀★鐵

二南・丹路・鮎美
艸樂・山雨樓

近作柳樽より

吊り下げたどれも淋しい服の色　舟々

二南――谷町あたりの風景でもあらうか。服一つ一つのあせた色合が泣き笑ひの人生を物語るかの樣に侘びしく店頭に吊られてゐる。廢退的な光景を偲ぶことが出來るのであるが私は又之をサラリーマンの生活に轉解しても見た。その場合私は此の句が漂はす「疲勞」の氣分をより濃厚に感受することが出來た。只此の句に就いて私の懸念する所は「淋しい」の語が近來餘りに頻繁に使用される爲或は常套の類に輕視されはしないかと恐れるのである。

鮎美――サラリーマンシップと見て靜かに對向し、服のこゝろになつてみたい。どれもこれも疲れたこゝろの服は襤褸せてゐた。あゝうつして見れば自己もうるほひのない哀愁をにぎつてゐることになる。心がうつゝていつそさびしく靜かに吊りさげられてゐる服がどんなにか貴くなつかしいものであろうか。

丹路――二南氏の觀賞並に「淋しい」の語に對する危惧、共に同感。但し句材、並に内容がありふれてゐると云つては語弊があるが、も一つ特異性のないのが、物足りぬ。或は僕の感受性の魔睡の然らしむる處かも知れぬ。

艸樂――僕も感受性の魔睡か、此の程度の淋しさは、あまりに心易く使はれる淋しさの如く思はれる。

山雨樓――事實舟々君は谷町の近くに住んでゐるので、あの安い吊り下げた服は毎日見飽いてゐることであらう。この句もそれからヒントを得たものと思ふが、二南説の「服のあせた色合」はどうかと思ふ。僕は寧ろ黑い重苦しい冬の色に、そして何時見ても變らぬ風景に沈痛な瞳を反したことゝ思ふ。

山深く　心さびれば　鳥が　鳴く　以都女

鮎美――吾が心のいゝくにあるをおもふとき許せぬ世相にまごゝろはとほく闇に埋れゐるなり。心の山深くあゆめば修道のひとりでにひらけきていつしんに悟るものありぬ。ときにほとゝぎすの一聲啼さてまごゝろに生きるものとなるなり。言ふ魂上心を詠ひたる秀吟、作者の心境すでに淨なり、ひとゝきたりともこうした淨界にいりたき希ひなる。「月よりも白きを見れば涙なり」とともに佳い句です。

艸樂――女性らしい句である。と云つて男が詠めない句でもないが　若し女性に川柳を奬めんとすれば、二月號で路郎主幹が書かれてゐた樣に、徒らに主人や姑の棚卸しや不滿が川柳でなく、此の句の如き川柳としての進む道のある事を、川柳を知らぬ女性に見せたい。

山雨樓――鮎美君は宗教的と云ふか逃避的と云ふか、兎に角さうした氣持からこの句を眺めてゐるやうだ。それもあらう。だが虚心に見てもこの句の持つ琴線には打たれるものがある。純情が自然の心に解け込んでゐる句。しかも眞實味に徹してゐる迄が川柳としてのよさに切り結んでゐる。

丹路――强ひて難を云へば、「鳥が鳴く」が

凡にすぎはしませんか。併し敢へて添削すれば作り過ぎに陷入るかも知れませんね。「月よりも」の方が叙法の點ですきがなくていゝ。

二南――諸氏の説に盡きてゐると思ふが私の句に對する潔辭性は「深く」と「さぐれば」を離すことが出來ず困つてゐる。勿論それを意識的と見るのは作者に對する禮を失してゐるかも知れぬが私自身どうにもならぬヂレンマである。

教會を出て金持の多い坂　九葉

山雨樓――普通の叙景の句のやうであるが作者はあるものを捉んでゐる。教會を出て神に一歩近付いた清い心を抱いて行く眼の前に、なんと金持の多きことか、と折角の清い心持ちが物慾の現實へ引きもどされる心持を巧みに表象化してゐる。

二南――私は作者を知つてゐる爲か山雨樓氏説の「捉み所」は輕度にしか感じない。寧ろ叙景としての價値が最大限に推賞したい。此の句の眞のうまさを知る爲には神戸を知らねばならぬ。それだけに私が誰にも彼にも此の句を激賞することは或は無謀かも知れぬ――ゝ、私は敢へて云ふ之程ローカルカラーを巧みに描寫した句を未だ嘗て神戸に發見しない。「神戸風景」は屢々同地の川柳人によつて作られて來たのであるが格別の膾炙的秀句を遺してゐない今日圖らずも神戸のインテリ九葉君によつて快心の作を齎らされた喜びを包み切れない。

鮎美――人の世の坂のうへにある神の扉を一歩出づればその坂のうへにブルジョアーの屋根は教會の鏡に見おろしてゐる都會響、――坂なき坂の――神々しさにうたれぬのか人間！とおもう。

丹路――僕は山雨樓氏の「あるものを捉んでゐる」は相當感じられる。併しそう意識的に物慾の現實に引きもどされてゐる作者とは思へない　むしろ教會と云ふ存在と場所的に關聯する富者との對照を無意識に感じて生れた風情を、風情故に輕卒に扱はずあざやかに川柳の世のものにされた手腕に敬服してゐる。

艸樂――僕も山雨樓氏説にまで、想到せねば物足りなく思ふ。こういふ風な叙景句に遭遇する度に、そう解釋せれば、川柳味といふ事にしばゝ疑ひをもつのである。

立腹の自分の鼻がみへて來た　芳岸

山雨樓――立腹と云つても激怒して喧嘩をぼつぱじめたと云ふ程ではあるまいが、心のうちではかなりの昂奮狀態にあるとき、ふと我に歸つてみると如何にも尖んがつた自分の鼻の先が眼にうつつた。そのときの輕いおかしみゝ自省とが、ぐつと心を押えつけたのだ。穿ちの句のやうにも見えるが單なる穿ちではない。叙法にも張りがあつていゝ。

艸樂――その鼻よき鎭靜劑なり、そして徒らに淺薄な立腹よと嘲笑する事なく、靜かに宥めてくれる鼻である。

丹路――山雨樓氏言に盡く。

鮎美――自制の鼻がシラノの鼻になつてゐますれ敵を愛する鼻ともなりませう、このごろにみる佳い句です、舊作の拙吟に「自制するからだの骨がぽきと鳴る」があります。

二南――之は珍らしい創作としてその特異を買ふ。自分の鼻の發見は一寸眞似の出來ないユーモリスト振りではある。

或る日に
世の中がおもろくなりぬぴはの花　愚寵

丹路――蛍ヶ池の句は常々愛好して、その作句態度に就て教へられる處が多い。併し多くの句は感傷に過ぎるとひそかに思つてゐた。感傷は感傷のための感傷であつてはならない。感傷をとほして句主の心臟の脈音がひゞかれはならぬ。こんなことを考へてゐた矢先、此の句の他「生涯を耳はしづかな姿なり」或ひは「びようゐんの句ひをしらぬ蝦蟇がゐる」等々の佳句を見ることは、喜こびしき限りである。但し此の句「おもろくなりぬ」は一考を要する。

二南――「おもろくなりぬ」はくだけ過ぎたと云ふ譏りを免れ得ない。丹路氏の「感傷」に對する御意見は私も常に考へてゐる所である。「地方柳壇」の選をしてゐる

と餘りにも上つすべりな感傷句の多さに全くウンザリされてゐる私である。併し螢ヶ池の方々が持つ深刻な感傷味は捨てられない。それだけに此の句に就いて丹路氏程の轉向的喜びは感じないが明朗方面に開拓を志すかの樣に見える螢ヶ池作家の今後の傾向を期待せずには居れぬ。最後に「びは」は「びわ」に訂正して置く。

鮎美―― 愚籠、靜太、噴兒、松雨、繰紅、苍巴、寒子、らのいつしんに詩魂の峯の淨かり。

艸樂―― 「或る日」の前書がついてゐるが、願くは常にも此の境地かもてたら一層幸福であらう。

山雨樓―― この句諦觀と神秘にふれてゐる一面象徵味を帶びてゐる。しかも二南君がのべたやうに「おもろくなりぬ」にくだけ過ぎた點もある。それが別段破綻を示してゐないのはこの句よく捉んでゐるからである。人が眼もくれぬやうな場所に枇杷の花は折り重つて咲いてゐるのである。その寂しさに徹した姿は自分の身の上にも何事かを考へさゝずにはおかなかつた。

それから 南君の言葉の中に「明朗方面に開拓」云々とあつたが、螢ヶ池作家にこの事を望むのは無理だと思ふ。僕は今迄通りの傾向でいゝ、其處に生きた句が生れそれがほんとうなのだと思ふ。

横顔へ話しかけむとして默り

青雨

丹路―― 作者の眼は正確に、弱い一面をもつ人間性に、向けられてゐる。どんな横顔か、どんな話か分らない點難があるとも云へるが、逃避せずに人間性の一面を靜かに正視して、そこに一つの川柳を拾つてゐる態度は稱されてよいと思ふ。

二南―― 躊躇と反省に強ひられた人間の弱さを語つてゐることは事實だ。最後の「默り」の短語が唐突に響くのもその心境を僞らぬものとして許せると思ふ。

鮎美―― しば〳〵てがけられた想なるも、「話しかけむと」の「む」がよいとおもはれる個性表現に佳いとおもはれてならないこうした平假名の用ひようも推賞しておきたい。

艸樂―― 唐突に響く默りの短語、たしかに反省のあとが見え、横顔に威壓されたりして話しかけられなくなつた樣な場合じない樣にとれて、丹路氏の難點はいくらか救へる。

山雨樓―― 僕はリズムのよさを買ひたい。

仕事着の泥が冷めたく乾いてる

心府

鮎美―― すでに心も渴いてゐたときであらう貴き仕事着にふと見えた泥、作者はどうおもはれたことか、勇躍の皮ともみらるゝこの仕事着の釘にぶらさがつた衰へよう泥もかほして作者をみてゐることがあるから直ぐ陽のなかにもみつぶして泥のかほを消してしまふ心にはなれないことだろう。愁しさが泥に問ひたくなつてくる。泥。人生もこんなにしてもみ消されてゆくこともある。ひとつふたつみつよつの泥が愛してゐてくれる人生詩だこの機械を探る。佳い句ですね。

二南―― 生活の靜止狀態にあつて作者は仕事着の泥に「味氣なさ」と「淋しさ」を感じてゐる。而も冰嘆的な語句を弄してゐない點がよい。得てして此の句の類はその傾向に趨り易い であるが――。序ながら「冷めたく」「冷たく」が正しいことを附言して置く。

山雨樓―― 百姓の生活で百姓もやつたことのある自分にはこの句の味がわかる。と云ふよりか同情が先に立つ。それは兎に角この句の「冷たく」はよく響く言葉だ、下五乾いてる」と言ひ捨てた點も餘韻があつていゝ。

艸樂―― 素直に感情を吐露してゐるのがよい。これで見ても殊に誇張したりせぬがよいのである。

川柳塔より

お雜煮の二杯目からは胡坐なり

變人

艸樂―― 秋が來たら誰も彼れもが淋しがるのが川柳家でなく、雨であつても、雪であつても、どつちでもかまはぬ樣な事を捉へてセンチメンタルな句が、近來あまりに多過ぎはしないか、尤も句は眞實を詠はねばならない。その生活なり、個性

から生れる正直な句は、文字の末をほぢくれば議論はあつても、句の內容はたしかなものがあると思ふ。

丹路――蚺樂氏評に同感。たゞ樂につくられてゐる點が、川柳のマンネリムに陷る危險性をもつてやしないか。變人氏にとつてはこの程度の句は樂に幾らでも出來るであらう。私は變人氏の習作として拜見した。

山雨樓――樂に作ると云ふことゝ、平凡な見方をする云ふことは、同時に起ることもあるが必ずしも同じことではない。この句はなるほど樂に作つてゐる。けれども、この境地を捉えた川柳の眼、は決してマンネリズムとして憂えるものでもなく、イージイゴーイングとして恐れたものでもない。寧ろこの境地はうつかり見逃して捉へ難いのである、僕はこの句の人間味を捨て難く思ふと共に、句主の生活が表はれてゐる點を微笑ましく思ふ。

路――僕が言つた「川柳のマンネリズム」は不可なかつた。個人の川柳作法上に於けるマンネリズムの謂である。そして之は僕自身に對するいましめでもある。

鮎美――謹肅な心のうちに變人氏の風格がでゝゐておもしろいとおもひますれ。

二南――異論なし

仕方なく自分が嘘を言ひに出る　紅

二南――人の性は善である。「嘘も方便」「嘘の世の中」とは云へ人は常に「嘘」に對し或程度の苛責と臆氣をたつ。殊に他に善人と呼ばれる人にとつてはその程度や大と云はればならぬ。而も切迫つまつて四圍の情況總べて嘘を要求する場合と雖も完全に良心を克服して嘘になりきることの不能は云ふをまたない。その脫し切れない善人性が遂に嘘を作ればならぬ場合のあきらめを表象するに「仕方なく」妥當であらうし、「自分が」は更にその姿を躍如たらしめてゐる。恐らく作者自身の心境をとるが、老練な佳句として推賞したい。

蚺樂――その仕方ない嘘は、言ひに出る事を皆んな巡してゐる。こゝは物腰軟かく年長の自分が一番貝つて出るべきであるといふ境地と取つて、其場の情景を映し得て剩さない佳句だと思ふ。

山雨樓――この句の評は前二君に盡きゐてるやうに思ふ。只一つ氣付いたことは、斯う云ふ句に接すると、この句の何處に詩があるのかと尋れるものがあるので、簡單に說明しておきたい。川柳は、川柳味と稱す制約された詩の精神をもつてゐる。その詩の精神の中には滑稽、諷刺皮肉等々色々あるが、それ等の持ち味がリズムの上に乘つて人々の心に烙印さられるところに詩は存するのである。川柳は詩であればならぬことは吾々も常に叫んでゐるのであるが、この句の中にも豐かな詩がはらんでゐることを特に申添えておく。

鮎美――好人紅氏の旅便りをよく項く小生なればこの意こそ臺灣あたりまで商嘘の妙を言ひにゆかれる心持々も含むでゐることは、見逃せないとおもふ、小生にとりては人知れず北叟笑まれてならない句です。

丹路――山雨樓氏は老姿心から氏の常々からの川柳に對する信念の一片を披歷された。簡單ではあるが、一夕にして得られない尊い氏の信念であると思ふ。句として味ある言葉だ。

子が欲しくない顏でゐる寶石部　紫方

蚺樂――その顏では子供なんか第一邪魔臭い、美しい者さを殺ぐ惡魔的存在しか思つてゐず、職務に勉勵する御亭主も構はず、孔雀の如く飾り立てた有閑マダムを呪つてやれ、で、此の句をもう少し鮮明に、強くして見たいと思つて、顏がゐるにしたり立つにしたりして見たが、根本的に改造せぬ以上自分の思ふ樣にはなり難いが、まだしも立つにした方がよくはなからうか。

山雨樓――立つにすれば人物の動作が出て姿態はつきりするが、この句の重點はその姿態よりも顏そのものにあるのであるから、原句の儘でいゝだらう。この有閑マダムはほんとに子が欲しくないのかどうかは別として、左樣に見てとつた作者の眼に川柳が宿つてゐるのである。

鮎美――山雨樓氏に同意です。

丹路――云ふべきことありません。

二南――勿論此の句の重心は動作に非ず顏であらう、だから私は立ちも感心しないが又原句のままでも物足らぬ。結局「顏で」を「顏が」と一字置きかへることによつて私自身は滿足出來ますが――。

本社如月句會

二月三日夜　於道頓堀倶樂部

節分のお化けで賑はふ道頓堀の灯の中から柳友たちが、トン〳〵と會場の段梯子を上つて來る、上つて來る。明日は立春といふ明るい氣分に包まれて、句の題も「節分」「千日前」など手近かな實感句境に浸たりつゝ、熱心なる句作及披講の後、山雨樓氏は「初代川柳の顔」と題して、川柳翁の野趣たつぷりな親しみやすい顔から來るヒントが、川柳詩の神髄と相通ずるものがあると言ふ事を中心に種々興味あり、有益なる講演があり、續いて路郎師は　皇子御降誕にあやかりて「伏屋にも一月二十日男の子」のおよろこびの顔を一同の拍手によつて迎へられ檀上からユーモアを交へた身邊スピーチがあつて皆を笑はせた後、益々好評の日本名物川柳「千日前」の選句披講をせられ十時半過ぎ盛會裡に散會(豆秋記)

出席者

觀月、遊歩、冬子、永之助、末廣、夕路、清一郎、一笑、一沫、紫石、白戀、彩泡、丹生、昇鯉、よし美、千代子、泉流、いわを、一羊、史呂、掉二、楳太郎、清美、ひろし。

(本社同人)

路郎師、緣雨、艸樂、冬呼、夕鐘、四葉、亂耽、かほる、おさむ、變人、春光、豆秋、鶴峰、山雨樓、青兒、勇、里十九、萬よし、翠夢、水車、靜太

席題　合圖　緣雨選

熱燗を合圖に席を立つて來る　永之助
君と僕合圖は笑ふだけの事　變人
合圖の目人波をかきわけて　よし美
スタートの合圖若さの意氣に燃え　昇鯉
ぶらんこを女合圖をしてはなし　掉二
監督の姿へ友の目がうごき　遊歩
三度目の合圖へ義理の顔を出し　史呂
足音かして不自然な咳一つ　觀月
棧敷からかはす合圖へ幕が開き　かほる
合圖して交叉點から後戻り　ひろし
合圖して別々に二人立つてゆき　艸樂
車掌吹く笛へ話がまだ殘り　一笑
目の合圖うつかり口がすべりかけ　同
(佳)合圖する窓があんまり小さ過ぎ　千代子
(同)ニツコリと笑つてゐる合圖らし　彩泡
(同)紫陽花の蔭から女合圖され　靜太
(同)合圖してこゝからきつい人通り　夕鐘
(同)うか〳〵合圖から叱られる　山雨樓
(同)玄關へ合圖の樣に靴を置き　かほる

席題　節分　かほる選

節分へ豆の堅さを考へる　昇鯉
節分に母の氣にする京都驛　夕路
節分が妹の姿を娘にし　清美
住吉の歸りお化は酔ふてゐる　永之助
節分の情緒女給の高島田　千代子
節分に結ふてそれから高島田　掉二
豆をまくことも忘れて酔ふてゐる　靜太
戀人を丸顔にさしたお化なり　夕鐘
節分と言ふ美粧院でまたされる　變人
節分の髮結さんは世辭がよし　艸樂
節分の夜を華やかに酔はされる　亂耽
節分の座敷へ父も母もゐる　山雨樓
年越しに話が決まり落ちつかず　觀月
年越しの髷弟を叱つてゐ　同
(人)節分の夜はうつかり歩かれず　一笑
(地)節分へ母はいつもの髮を撫で　山雨樓
(天)節分に挨拶に來た髮の艷　いわを

席題　姿　亂耽選

もう一度見たい姿へ振りかへり　一羊
裏切つた已が姿の夜の壁　千代子
他人の空似後姿に氣を引かれ　夕路
姿など氣にして春をどうする　昇鯉
惠まれぬもの、姿へ風が吹く　おさむ
出前持寒さ知らずといふ姿　春光
子の數へ朝の姿をとり戻す　山雨樓

行きづまつた巳が姿に落葉する　艸樂
(佳)見て貰ふ姿で出るがはづかしく　同
(同)傷心の姿枯野の中に居る　四葉

席題　出前持　艸樂選

出前持途中であへば無口なり　掉二
出前持霜焼けの手をソッと引き　史呂
出前持灯のつく頃の忙しさ　夕路
出前持侮蔑を耐へて腰を曲げ　丹生
引越しへ氣合を入れて出前持　永之助
出前持遅いと云はれ尻から出　冬呼
おそかつた言譯のうまい出前持　變人
人波を上手に拔けるセイロそば　四葉
出前持落し風呂から唄ふなり　おさむ
出前持臍のあたりが寒く見え　春光
愛の巣の色を出前が見て戻り　夕鐘
出前持夜逃げする事きいてくる　ひろし
出前持のれんをわれば冬の街　亂耽
出前持三丁ばかり損をする　かほる
出前持に曲乘りといふ藝があり　萬よし
出前持丹那きてゐることをしり　遊歩
出前持大きい聲ではいつて來　同
(佳)花嫁の顏を見てきた出前持　末廣
(同)出前持指は物理を知つてゐる　春光
(同)出前持こうべは失業地獄なり　よし美
(同)逢摩さんに私淑してゐる出前持　亂耽
(同)箸持つた出前持すぐ走らされ　山雨樓
(軸)庖丁は研ぐ時ばかりの出前持　艸樂

席題　約束　互選

かれのいる約束寒い風が吹き　一笑
約束の人は洋行してゐます　清美
約束へ雨になり雪となる　勇
約束があるに留守番たのまれる　よし美
約束に外れむかつく月を見る　昇鯉
約束を反古にするのにとぼける手　四葉
お約束と云ふお座敷はきれいなり　彩泡
こわばつた舌は約束悔ひてゐる　紫石
母と子と明日を約束して眠り　おさむ
約束一度破つてそれつきり　春光
約束の日の眞心は雨に濡れ　靜太
約束を忘れ奇麗な瞳なり　豆秋
約束に互に親のある身體　變人
約束は二人になつた腹を立て　山雨樓
約束の五分前なるコンパクト　觀月
約束のうれしい帶を結ぶなり　同
心と心の約束へ發車ベル　亂耽
好もしくない約束を強ひられる　同
約束を違へて口が達者なり　艸樂
約束へ一寸待てよと目をつむり　同

本社三月例會

▼名所川柳は益々好評で、既に道頓堀、大阪の夏祭、四天王寺、ダム、築港、新世界、粟おこし、十日戎、千日前と續いてゐる。當夜出席されて盛んに佳吟をお吐き下さい。

日時　三月三日(土)午後六時半
會場　道頓堀倶樂部（大阪市日本橋南詰東入南側　電話南二七四八番）
兼題　「大阪城」三句　麻生路郎選
講演　題未定　楊井二南
會費　金三十錢（鉛筆持參）

川柳パイロット欄

句品は高く

福田山雨樓

前回募集の題は「夜學」だが、本欄に始めて投句された方は十四名あつた。先づその方から拜見しやう。

(1)夜學の灯村は大きく育くまれ　一曉
(2)寒行の聲さむくまうう夜學の灯　白葉
(3)近き友誘ひもせずに行く夜學　トミヤ
(4)算盤の音で夜學を誘ひに來　謄天
(5)あんまりな夜學の友の老けすぎ　しのぶ
(6)夜學ふとこんなにしてでもと思ひ　都留逸

此の配列は比較的類似した句想のものを二句宛並べて見たので(1)と(2)は夜學の灯を對照としてゐる。前者は夜學の灯によつて村の文化が開けてくると云つたところ、見方はおとなしいが鄕土色が出てる點がいゝ後者は寒行と夜學を對比した感じだと思ふが中七の表現は推敲が足らぬ。この句は「寒行の冷えへ夜學の手が上り」と云ふ風に仕立てゝ見てはどうか。(3)と(4)は相反した姿を求めてゐるが、後者の方に川柳のうま味がある。これは前者に想そのものに無理と云ふか妥當性に乏しい點があるので、一寸肯き難い。川柳は誰が聞いても直ぐにその妥當性がわかり、そして妙味に感心さすやうな句が普通上乘なのである。事實が突飛であればあるだけに相手を肯かしめた上、更にその意表に出でた點を感嘆せしめなければならない

(4)の句には類句があるが句主の表現力は買つておく。(5)と(6)は所謂主觀句であるそれだけに實感味がある。しかし(5)の句は「夜學の友の老け」と云ふ想に「あんまりな」と「すぎる」とを附足して意味を強めたものだが、ちと強要の氣味である。もう少し内容をもたせて「三十を過ぎて夜學にあせる友」としてはどうか。(6)の句は今一歩と云ふところであるが句意は肯ける。

(1)居睡りのやつと適ふた夜學なり　三九
(2)しくじりも夜學の出來へ忘れら　もとを
(3)夜學生へそ繰り法にたけてゐる　照坊主
(4)夜學今飯を嚙み〳〵驅せつける　錦城子
(5)夜學校遲れたまゝの鐘が鳴り　たけ路
(6)先生の希望もうつす夜の窓　南葉
(7)夜學の子まだ歸らない雨の夜　一夫
(8)夜學でゝ今は社長になりすまし　春子

三九君のはとてもづるい夜學子だね。しかし職業の餘暇疲れた體で通ふのだから睡魔をどうすることも出來ない場合もあるだらうその境地には同情が出來るし叙法も面白いが、下五を「夜學なり」で止めてあるので句が緊らない。これは「夜學を出」とか「夜學濟み」にしたい。(2)は失策といふのが抽象的ではつきりしない。上五を「霜燒けも」と云ふ風にしたら句がもつと生きて來る。(3)の臍繰り法とは母などから小遣を出させる意であらうが用語が無理だ。著想も多少ふざけたところがあつていけない。もつと素直な想を選ぶこと。(4)は實感、或は實見の句かも知れないが句の品が低い。餘りに卑俗である。その點を考へて「落着かぬ飯じ夜學は驛へ驅け」としたい。(5)は句意がはつきり汲み取り難い。「遲れたまゝ」は時計のことであらうが、それでは「鐘が鳴り」がおかしい。斯う云ふ句を燃燒不足と云ふが作者は出來た句をよく自分で檢討してから投句するやうにされたい。(6)も句意がよく表れてゐない。先

生の希望とは意見とか鞭韃の言葉とか云ふのだらうと思ふが、それをうつすと一只筆記する意味にしかとれない。夜の窓は夜學ゝ云ふことを示したものだが、斯る意見などはあながち夜學に限らぬことだ。つまり句意に動くところがある。句の覗ひ所をよく定めて作句しなければいけない。(7)は親としての心遣ひは出てゐるが、そして句の體調つてゐるが、説明の域を脱してゐない。(8)は有りの儘の姿を叙しただけのもので、川柳味乏しい。皮肉なら皮肉でピリッと應へるところがほしい。「夜學出た頃はと社長二タ口目」

次は本欄へ二回目以上の方の句を拜見する

(1)失職へ夜學教師をすゝめられ　伶人
(2)せめて夜學へと肩ぶがて語る友　輝親
(3)夜學の子三面記事でほめられる　美津女
(4)夜學へと頭をしぼる社會學　清雄
(5)夜學まだ實力の世と決めてゐる　正一

この五句は所謂客觀體の句であるが、着想が素直過ぎて趣が足りない。「さうですか川柳」と稱される部類に近い。もう少し句想に苦心して貰ひたい。右の内では(5)の句に作者の思想が出てゐる點をとる。それから本欄へ第一回以來續けてゐる清雄君の熱心さには感心する。

(1)裏口へ戻る夜學は犬が好き　規堂
(2)夜學から歸つて母と茶漬をし　葉光
(3)賃縫ひの背へ夜學の子が歸り　晃路
(4)講師の若さへ夜學の冷え　水客
(5)青訓の夜學かちチョットん屋　柳夢
(6)赤い灯のジャズ夜學の窓にれ　美坊
(7)夜學校先生らしい顔もゐる　秀太
(8)ペンさらく鮮の交る夜學校　愚堂

以上八句はみな夫れ〳〵に特異な、奇拔な句境を見付けたもの、或ひは表現したものを持つてゐる。其の點で稍活氣を呈した句といつていゝ。(一)は愛犬に對する情味が紙面に溢れてゐる。(2)は茶漬をもつてきたのがいゝし情愛はうかがはれるが、句の前半に叙法上だれたところがある。(3)は賃縫ひといふ言葉に働きがある(4)は何か見据えてゐるところはあるようだが、よく出てゐない。(5)は叙法上の鍛錬が足りない。「青訓の夜泣きうどんへ二人それ」としてはどうか。(6)はチト表現がぎこちない。添削句「ジャズの音かすか夜學の邪魔をする」(7)は前にあつたしのぶ君の句に似てゐるが、この方にうまみがある。(8)は前の三九君の句と似通つてゐるが、この方に面白味がある。

(1)星よ我夜學する身の理想あり　默紅
(2)夜學からはや二年目の月と知る　清春
(3)疲れ切る心へ夜學あらたなり　小松
(4)夜學ふと手相信じてみたくなり　呑空子
(5)夜學生ふと昇給が氣にかゝり　天秋(木石改)

この五句は所謂主觀句である(1)は感想めいた言葉で生まの感じがする。「星よ我」も拙い。添削句「星空へ夜學理想があるげかり」(2)は夜學の經過を述回した感想に過ぎない。そこに獨自の感懷を盛らなければ味はひがない。(3)は今一歩と云ふところだが言ひ足りない。「疲れ切る厚司夜學へ甦り」としては如何。(4)と(5)は純主觀の句、そして何れも「ふと」を使つてゐる。この「ふと」が常套手段に用ふるのはよくないが、この場合は自然でいゝどちらも實感味がある。

さて以上三十二句の中から騰天、正一、規堂晃路、秀太、愚堂　呑空子、天秋君等の句を出色とする。

——次回課題——

「國旗」一句
三月十日
大阪市浪速區湊町保線事務所
福田山雨樓宛

名切
宛〆
但し一般投句と共に事務所へ送らるゝも差支なし

古狸窟雜筆

梅本塵山

緒言　俗諺に狸の睾丸八疊敷といふは、如何なる理由の有るか知られど、予の書齋を古狸窟といふ。書齋とはいへども、客間ともなし寢室ともなす、僅に八疊の一間なる故也。此稿は其處にて筆を把るに由りて頓て古狸窟雜筆といへり。狸に關する事を多く記せるは、平素、彼れを愛好する故にて、他意あるに非ずと云ふ。昭和七年十二月一日。

(一)田　猫

「禰古萬百話」加藤閑齋隨筆

我國いにしへは、田家狸を養て、田鼠を防ぎしといへり。按るにここに猫の渡らざりし以前は、狸をもて猫にかへしにや、さてたぬきは田猫なる可し。ぬはねに通じ、きはこに通ず、思ふにいにしへは、和漢とも田鼠今より、殊に多かりしにやあらん。

(二)家狸、野猫

「禰古萬百話」

猫と狸は大に因あり。猫の異名を家狸といへば、狸の異名を野猫とよべり。猫は家の狸にしてよく家の鼠を狩り、狸は野の猫にして田鼠を防ぐその異名おの〳〵かへて妙なり。

(三)源　内　狸

古來、佐渡國相川町に近き、二つ岩といふ所に、團三郎と稱する狸の住むことは諸國に記され居るが、此外に源内狸といふもの有るか、或は一の狸に二の稱あるか、猶考ふ可し。

「鳴呼矣草」卷之四

佐渡國に狐の居らざること、普く人の知る處なり。然るに奇怪なる狸の首領有て民俗なれど源内狸と云ふ。數丈の大石ありて、これに已が精を詫し、吉凶悔吝を豫めに人に告ぐ、大に驗有故愚民欲すること有ときは　右の大石に向ひ欲する事を祈るに、尤しるし有とかや、一奇事なり

(四)人山人海

我邦にて、人の多く群集する狀を、人の波また人の山ともいへど、人の海とはいはず、然るに人海といふ漢語あり。

「金瓶梅」第六十四回

諸了報恩寺僧官來、起棺轉過大街口、望南去。兩邊觀看的人山人海、云々。

(五)千　鳥　足

醉漢などの蹌踉として歩むを、俗に千鳥足といへど、衆人の行列を正しく歩むをも、千鳥足といふが如し。

「太平記」十二卷

侍十二人に隻口をさせ、千鳥足に踏せて小路を狹しと歩ませたり。云々。

(六)越　中　褌

越中褌といふものを、松平越中守定信の創作されたるもの也といふは、採るに足らぬ妄說也。

「鎌倉諸藝袖日記」卷之二寛保三年印行

亭主は丸裸になりて、越中褌ひとつの體云々。

（七）鶉　衣

襤褸のことを鶉衣といふ。此れは邦語なりと思ひ居たるに、猶且漢語也。劉兵鄉の行營酬呂侍御詩に

井稅鶉衣樂、壺漿鶴髮迎。

と有り。

（八）目　水　晶

眼識の明なるを目水晶といふ。

「壇浦兜軍記」

掛替もなき弟の俺を勘定なされし、我親の忠淸殿は目水晶。云々。

（九）燈臺下暗し

燈臺下暗しといふ。我邦の俗諺に似たる語は、支那にも有り。

「金瓶梅」第六十九回

原來燈臺不照自。

（一〇）袴　着

近世、七五三の祝とて、十一月十五日に三歳五歳七歳になる男女子の、髮置、袴着、帶解を祝ふ習慣なるが、古は袴着を十一月にも行はれ、四月にも行はれたり亦、今日にては男子の五歳になる時、袴着をなせども、古は女子の三歳になる時袴着をなしたる例あり。

「榮花物語」第十二

今年は姫宮の御年三つにならせ給へば、四月に御袴着の事ある可し。（中略）内には、四月朔日、姫宮の御袴着なり、云々

（一一）狸の腹皷

我邦のたぬきとむじなとは、同物異名なるに、之れに就て屢々論議さるゝ事あり此れは或る地にてはたぬきといひ、或る地にてはむじなといふ故に、世人は別種のものと思ふならむ。亦、あなぐまをたぬきと呼ぶ地あり。たぬきに狸の字を當るは誤にて、貉の字を當るを正しとすといふ。狸の腹皷を擊つといふ說は、古より有りしものならむ。

「夫木集」卷二十七

人住まで鐘もおとせぬ山寺にたぬきのみこそ皷うちけれ　寂蓮

「倭漢三才圖會」第三十八

故名二之野猫一、或皷レ腹自樂、謂二之狸腹皷一、或入二山家一坐二爐邊一、向レ火乘レ暖、則陰囊垂延廣二大於身一也。

（一二）う　じ　な

むじなの古名を、うじなといふ。これは此獸の動作が、蠢爾として蛆虫に似たるに由りて、斯く名づけたるならむ、といふ說有れど如何にや。東京市大森區馬込町に貉窪といふ大字あり。越後國蒲原郡に貉京といふ地名あり、常陸國筑波郡に貉淵といふ村あれども、うじなと稱する地名は無き歟。按るに廣島縣の宇品港は貉港なる可し。人名には「日本書紀」天武天皇紀に、石川朝臣虫名あり、光仁天皇紀に、刑部直虫名あり。この虫名は即むじなを也といふ。

（一三）氷　魚　威

緋威の鎧といふは、緋色の革にて威したるものをいひ、緋染の絲にて威したるを絲緋威といふ由なるが、此外にひをどしの鎧といふものあり。

「夏山雜談」

ひをどしの鎧と云ふことは氷魚威なり。さしぬきのくゝりにも氷魚くゝりあり。うすき水色のよしなり。

（一四）法　螺

虛言を吐く者を、法螺吹といふ。此れは佛典より出たる語也。

「法華經序品」

欲說大法雨、吹大法贏、擊大法皷、演大法義。

（一五）禿　頭

昔は男子の禿頭を、きんかあたまといひしが、今は蠅すべりと而已いふ。江戸時代に、きんかん元結といふもの有りしが此れは小兒老人などの、髮毛の寡きものを結ふ料なれば、きんか元結なる可し、蠅すべりといふ語も、古より有りし也。

「兩吟一日千吟」延寶七年印本

きんかにて四國廻りがなる物か　友雪

蠅はすべれど殺されもせず　西鶴

各地柳壇

いのちあるを句を創れ

路郎・雨絲・二南整理

皇太子殿下御降誕 奉祝記念句會（神戸）

二月三日　於協和會館　明珠報

神戸市内各川柳團聯合を開催參會者五十九名神戸に於て近頃になき盛會であつた。

席題　樽　素生選

（佳）酒樽に主人は顔をちよい〻出し　吉左右
（同）立女形誰れの型かや樽に掛け　一狂
（同）酒樽を一挺据えて店になり　嶺月
（同）宿替にまだ少しある醤油樽　清公子
（同）自轉車に空き樽たんばうまく積み　主税
（人）口を切る樽を見つゐるコップ酒　同
（地）寒の水へ漬物樽をしめすなり　規堂
（天）幔幕の潜戸からも樽が見え　一狂

席題　鳥居　九葉選

（五）團體のみんな見上げてる大鳥居　朝雨
（同）赤い鳥居お稲荷さんとすぐ思ひ　猿兒
（同）信心へ赤い鳥居の坂がひえ　麥刀子
（同）見つむれば鳥居二月の姿なり　伸路
（同）手の届く樣な鳥居をたんと抜け　紋太
（人）大鳥居乞食に隙を見つけられ　睡花
（地）女連れ鳥居をくゞる背が冷え　卯生
（天）分り切つてゐるが鳥居へ子が隙れ　一琴

席題　東　春秋選

眼れない車窓に東白みかけ　驟雨滾
一番汽車東へ向いて煙を吐き　重陽子
朝寢する部屋へも同じ陽が當り　夢遊
朝々の姿東へ手を合し　鬼石
（人）東京で文士のくずになつてゐる　九葉
（地）飛行機で名士東の歸途につき　規堂
（天）活動で見た東京を歩かされ　九潤
（軸）東から西からえら奴が出る

席題　刀　東洋鬼選

（五）先祖の日先祖を偲ぶ太刀を抜き　麥刀子
（同）政治家の宿へ刀屋連れられる　一狂
（同）面白さは車通りに刀鍛治　主税
（同）抜いたまゝ二本三本刀店　紋太
（同）日の本のどこに住むも刀鍛治　睡花
（人）刀劍師世の外にゐて笑ひあき　同
（地）紹介狀を吳れて刀の話など　卯生
（天）借りに來た弱味を思ふ刀掛　九葉

兼題　護る　明珠選

（佳）兎も斯くも護り通した母の髪　孔星
（同）大空を護る石鹸などを買ひ　朝雨
（同）息子今日朝からラッパ吹いてゐる　重陽子
（同）鹵獲所ハ護符がすゝけてゐる　鶴太郎
（同）家の名を護りつゞけて村に老ひ　一狂
（同）父母を護り都會の端に住み　同
（同）寒い空ちいさな護符をろて去に　九葉
（同）保護願今日も女房と飯をたべ　同
（人）耳掃除して日本のありがたさ　苦樂公
（地）馬鹿者を捨てゝもなほぬ保護願　春秋
（天）優勝旗ぐるりはみんな味方なり　紋太

兼題　合唱　睡

（五）合唱に氣になる聲がつゞて來る　白龍城
（同）合唱へ今馳けつけた低い聲　南耕
（同）合唱の水ノ江瀧子肩を組み　一狂
（同）合唱の乙女心と遠く置き　素生
（同）合唱の詩りは少女歩を揃へ　同
（人）先生も合唱をして別れる日　明珠
（地）君が代のあと年輩な咳をきき　由峰
（天）合唱へもゝゝつとして我が子なる　紋太

兼題　鶯　鶴太郎選

鶯と寫つされて居る未亡人　秋彦
胸を病む身に鶯が飼はれて　助二
鶯を左遷と思ふ土地できゝ　素生
（人）鶯を口々眞似て登り坂　嶺月
（地）名鶯へ大阪の燈はまだ寒し　淨平

(天)鷺をはるかにきいて墓の水　睡花
兼題　袴　紋　太選
袴はいて養子の姿侮れず　一狂
ちぐはぐな心袴をつけたまゝ　芳弘
袴はくそばには母も妻もゐて　鶴太郎
袴から開放されしめしの味　竹楓
太郎冠者袴へ置いた手が白し　同
セル袴遊んで喰へる身に非ず　夢遊
(人)酔ふた手に袴の紐のだゞ長さ　由峰
(地)袴をはいて荒れた手をもむ　卯生
(天)袴また袴表彰式が濟み　旅雨

川柳雑誌社　**高知句會**（高知）

壹月廿一日　於ビラジル樓上　中澤濁水報

席題　階　級　六　紘選
特等の頭が邪魔な普通席　啞聲
階級の顔を給仕は顎で讀み　紫白
(人)階級の不平に私情覗かれる　青果
(地)階級の眞ッ只中の一等車　龍尾
(天)階級をはつきり知って朝を出る　春水
席題　ストーブ　紫　涙選
ストーブへ子なき夫婦のふと淋し　春水
ストーブへ來て商人の如才なし　春水
ストーブは派手な食器の音を聽く　龍尾
(人)ストーブに自分の靴がふと古し　春水
(地)ストーブの外音のない物が降り　啞聲
(天)ストーブは下給社員へ遠いなり　六紘
席題　手　袋　啞　聲選
手袋に今日の切符が渡される　春水
敬禮をする手袋の眞白い　青果
(人)手袋の孔も職掌柄にして　同
(地)手袋へ釣錢しかと受取れり　六紘
(天)先輩とゐて手袋の氣かとがめ　青雨
席題　日光浴　龍　尾選
サンルームもう牛乳の腹が減り　青果
バイブルに日光浴の背を忘れ　濁水
厄年がふつと氣になる日光浴　春水
新聞の白さも溫い日光浴　六紘
煙突の影が氣になるサンルーム　紫白
人)日光浴心は別の世界なり　六紘
(地)日本がふつと氣になる日光浴　春水
(天)日光浴世間を狹いものにする　六紘
兼題　ヤスリ　濁　水選
尠うしはヤスリも減ったのに氣づき　青果
(人)ヤスリ今鐵に喰ひ入るたのもしさ　春水
(地)瓜先の戀に生きたい豆ヤスリ　龍尾
(天)氣長うに擯なヤスリの音がいゝ　青果

川柳雑誌社　**松江句會**（松江）

二月一日　於天神ミドリ喫茶園　卷二報
兼題　つらゝ　柳　人選
我々戀は氷柱解けるに似て　悲し　冷兒
(秀)想ひ出にポタリ氷柱の解ける朝　同
(同)春が來るそうな氷柱が解ける　磨須雄
(同)氷柱光って朝の活氣となる　卷二
(軸)貧乏の家につらゝが光るなり　大鳥
席題　職　人　選
職人の聲も矢張り春めいて　冷兒
職人に片意地な戀出來かゝり　柳人
職人はあわてる氣味で禮を受け　卷二
職人は無に夜を寢てしまひ　柳人
職人は筆がちびてる事にする　卷二
席題　鮭　卷二選
鮭の味不足の云へぬ家庭です　冷兒
鮭の色冬の味覺をそゝるなり　大鳥
二階借り鮭を吊して夜となり　柳人
(佳)貧血の手が職鮭をつゝき居る　都之介
席題　辻　莞　路選
辻電話彼女へ手段あるのなり　大鳥
辻折れて哀しき吸殼を捨つ　都之介
心せく辻に光って女居る　柳人
艶歌師はいつち外れの暗い辻　卷二

阪大川柳會（大阪）　丸島利生報

兼題　參　詣　路　耶選
更生の意氣すられて歸る初詣　一杯
時めいて伊勢參宮を報ぜられ　方正
お隣りは戒詣りか飴を吳れ　柳秀
泣くやうに拜む心を神や知る　芳一
みくじひく美妓のなじに初日射し　青一路
赤手柄こうなりましたと禮參り　あさ女
惠方詣り二人が遭うと酒になり　柳秀
參詣は參詣として寄るところあり　栞
片戀を聖天さんに打ちあける　湧三
參詣といふいでたちでウエトレス　青一路
幸福な家族へ巫女は鈴を振り　柳秀
柏手は善人らしく音をさせ　一杯
訴へるやうに社殿の鈴をふり　湧三
缺かさずに詣るを妓得意がり　青一路
本願寺疊の數もかぞへられ　利生
ザット拜んで繪馬堂でまち合し　路生
信心に雪の降るのも有りがたし　柳秀
初詣で妻と歩くは久振り　利生

圍碁の頭の上で鐘がなり　たけを　同
(人)參詣へわたしもとゝ連れが出來　氷炭　正甫
(地)ケーブルでするおまるは面白し　路生
(天)儲けてもまだ儲けたい　初詣　芳一
兼題　やり繰　路　耶選
やり繰りを手柄に家政さづけ出し　香附十
里へとも云へず腕組む十二月　柳秀
やり繰りに駈けづる街は霙れてゐ　栞
やり繰の店とも見えぬ明るさよ　正甫
やり繰の金とも知らず盗み出し　一杯
なる樣になれとやり繰强氣なり　路生
問屋筋よつて潰せぬ店であり　栞
結局は女房里へ使者に立ち　あさ女
首が廻らぬと云つて飲んでゐる　青一路
閉店の噂さもあつて一年過ぎ　あさ女
(五)やり繰のつかぬ金庫が光つてゐる　路生
(同)やり繰へ衣桁の襦袢赤すぎて　一杯
(同)やり繰のつく算盤はじきも　路生
(同)金策に盡きて皈つた灯の暗さ　柳秀
(同)どうやり繰るかあいつ生きてゐる　路生
(人)工面して來たとも見ぬ五圓札　利生
(地)やり繰に痩せだだを醫者に見せ　湧三
(天)やり繰がついてきのふの人ならず　同
雑　吟　路　耶選
胸襟を開かずグイ〳〵飲むばかり　利生
使つてた人をたづねる日は寒し　芳一
數へるにパチつかせぬて他人の金　氷炭
人情を云へば歩けぬ世だと云ふ　方正
園はれて居ても矢張り人の子か　一杯
今更に戀を氣附いて間に合はず　栞
(人)心得た女中に女氣に入らず　同
(地)辯護士といふ唇の薄いこと　氷炭
(天)金錢次第少しの才をとりあ　方正
席題　二階借　路　耶選
二階でも借つてと女本氣なり　橙舎
一本になつて二階にすむでゐる　湧三
二階借り一戸構へたやうにいふ　同
二階借當番きめて火をおこし　芳一
二階借しても嬉しい若夫婦　同
二階借朝日まばゆき日曜日　氷炭
二階借小さくなつた火をいぢり　同
あのフェルト二階借とは思はれず　力正
附馬が二階借とは知らず來る　同
お産まで二階でゆこう共稼　同
そもそもは二階に居つた時分から　栞
二階借名刺を一寸下げて貼り　同
問題を殘して去つた二階借　同
立志傳の其の逆を行く二階借　山彦
原稿の反古反古反古の二階借　同
出前持二階の人の名は覺え　同
二階借まだ〳〵起きてこぬ夫婦　たけを
往診にこんな梯子をのぼらされ　同
二階借士族が鼻にかゝるなり　同
二階借娘に派手な風をさせ　同
二階借生駒の山もちよつと見え　同
二階借下とは宗旨違ひにて　同
二階借聖上陛下の額もかけ　路生
屋根裏の處女と呼ばれて勤めてゐ　同
お二階の先生たまに泊つて來　同
先生と呼ばれ二階で鮭をやき　同
二階でも借る相談に落ちて行き　同
愛の巣にしては二階のぢぢむさし　同
二階など借りなと伯父はさばけてゐ　同
(人)とう〳〵なになりまして二階借　正甫
(地)やり繰も知らず二階の蓄音機　橙舎
(天)港區の二階をかつて時期を　路生
(軸)悠然と雨を見てゐる二階借　路耶
(同)金言に見離されてゐる二階借　同
(同)二階借代議士ほどは喋べれる身　同
(同)又心機一轉といふ二階借　同
(同)ライスカレーお二階きとつけ置き　同

川柳雜誌社天王寺句會（大阪）

二月十一日夜　於羽衣喫茶店　福田鶴峰報

兼題　國旗　豆　秋選

下宿やで國旗を出せば爲替が來　靜太
港から町一勢に日章旗　一曉
君ゝ代に春風吹いて大國旗　葉光
うれしさは木の葉紅らむ日の國旗　機見女
女子と云ふ寂しさ國旗見つめたり　しのぶ
君ケ代のリズムにつれて日章旗　彩泡
出征の國旗子供は振るばかり　丹生
日の丸の旗がまぶしい朝寢なり　變人

席題　マスク　互　選

マスクかけて無口な人になつてゐる　機見女
眞劍な顔消防のガスマスク　しのぶ
親切な人はマスクをはづしたり　變人
流感と別にマスクのいる床屋　彩泡
小走りにマスクの人が行過た　丹生

席題　變裝　南面子選

變裝にかくれたい癖があり　彩泡
變裝のまゝ起こされる留置場　しのぶ
變裝をすると勇氣が要るのなり　變人

變裝の父を子どもはうれしがり　豆秋
その變裝は畫見る顔でなかりけり　機見女
席題　純情　機見女
純情を笑つて仲居すゝめに來　しのぶ
純情の君に衣裳の野暮すぎる　南面子
弄ぶ心へ純情面白し　丹生
純情へ言葉のすぎた事を悔ひ　彩泡
純情ははがきに書いて足ぬなり　變人
席題　握飯　變　人選
大掃除且那も今日は握飯　彩泡
握飯子の數だけの大包み　南面子
握飯けむりにむせ食べるなり　豆秋
握飯かけひの水の冷やゝかさ　機見女
(佳)握飯持つて燒跡まだ見つめ　しのぶ
(同)握飯片手は土がついてゐる　豆秋

川柳雜誌社　**玉造句會**（大阪）

一月二十七日於東雲倶樂部　佐藤しのぶ報

兼題　スキー　艸樂選

スキーから狹い世間へ歸るなり　春光
スキー場で課長の鼻も赤いなり　豆秋
やり繰りで買つたスキーもよく辷り　四葉
スキーマン銀座を狹く歩いてゐ　鶏牛子
三等車スキーの長さ持ゝあまし　昇鯉
スキー場を見上げる窓の白い呼吸　夕鐘
シユウプルに畫く二人の戀心　翠夢
(軸)面白く辷れるスキーに戀がある　艸樂

兼題　幸運　鶏牛子選

幸運に獨りぼつちがさびしくて　夕鐘
幸運を知らす便りは筆で書き　春光
幸運をどこで聞いたか記者が來る　友帆
幸運のお守り札へ垢がつき　豆秋

席題　炬燵　夕鐘選

慾捨てた心炬燵へ丸く寢る　雀踊子
七十の母の炬燵へ氣を遣ひ　鶏牛子
炬燵から襖の隙へとどきかれ　艸樂
汗ばんだ手に手がからむ置炬燵　小松園
儲からぬそろばん炬燵をすべる　豆秋
(軸)唄本を伏せたまんまの置炬燵　夕鐘

席題　補助椅子　小松園選

補助椅子に無産議員のつゝましく　鶏牛子
補助椅子のマダムの聲がとがりもり　夕鐘
補助椅子の方から彌次る初芝居　しのぶ

席題　街の灯　春光選

ネオンサインかざして見るも國の母　夕鐘
街の灯に女の素性見とどける　鶏牛子
街の灯へ腐つた心捨てに出る　艸樂

席題　ラヂヒー　雀踊子選

ラヂヒーの放送あつさり切られたり　鶏牛子
ラヂヒーに敗けて六甲嵐知る　同

席題　感激　豆秋選

胴上げをされても一度感激し　艸樂
再會に唯手を握り手を握り　四葉
感激の瞳へ母の手が荒れて　雀踊子
(佳)感激の一打サイレン鳴つてゐる　鶏牛子
(同)感激の眼鏡はしばし曇りたり　夕鐘
(同)優勝旗受とる顔はうつむいて　艸樂

川柳雜誌社　**鶴町句會**　於變人居

三月六日夜

兼題　國　雅幽選

わしが國自慢話の宿泊所　よし美
國境ひ何時も變らぬ青い空　正路
新春の日本の國を有難み　小梅子
提灯だ旗だ日本は春なりし　白峯
よろこびの國へ電波が流れたり　變人
(軸)内亂を他に支那人賣り歩き　雅幽

手帳　變人選

頭ペコ〳〵手帳につけられる　一笑
手帳からあつさり電話かゝつて來　白峯
戀をした頃の手帳の二三行　雅幽

片戀　小柳子選

一ばいの酒片戀の味がして　一笑
片戀と知つてゐながら文を書く　よし美
片戀のこゝろも俺に似た一人　白峯
片戀はあはてゝ視線をらせけり　突破坊
片戀もして人生を渡り　正路
日めくりをうつかり見てる片戀ひ　變人
片戀へあまりに山は晴れ渡り　雅幽
片戀の淋しく街の月を見る　同

銀貨　白峯選

給料日銀貨にかへて歸るなり　小柳子
すしを食ふだけの銀貨を握つて出　雅幽
銀貨落せば銀貨の音がする　一笑
抽斗に銀貨一つの公休日　よし美
まだ呑める銀貨がありて肩を組み　變人
銀貨一つ女房突こむ事があり　同

朝寢　一笑選

朝寢坊病人らしい聲を出し　突破坊
馬乘りの子に起され朝寢坊　よし美
公休日子を遠ざけて朝寢坊なり　同

川柳雑誌社

今治句會（今治）

正月四日　於熊の井　渡邊曉童報

兼題　ぬかるみ　曉童　選

ぬかるみに鼻緒のゆるい口惜しさ　心府
行軍の何處迄續くぬかるみぞ　蛇之助
ぬかるみに絹ハンカチが落ちてゐた　小樓
ぬかるみへ來　氣が付いた不幸者　尼花
ぬかるみを月が教へて立ちどまり　星湖
ぬかるみのような社會に媚が要り　史朗
ぬかるみをトラックやけに走らせる　心府
ぬかるみへサラリーマンの愚痴がもれ　小松
ぬかるみへ戀〻ないのが待つてゐる　尼花
ぬかるみへネオンは毒の花のよう　尼
悠々とぬかるみを行く自家用車　一画
（人）距つれて月のぬかるみ美しい　史朗
（地）ぬかるみも初日の色に染められる　心府
（天）ぬかるみへもう金箔のこんがつき　宵明

兼題　白　小樓　選

佗びしさは眞白き花をいけてゐる　尼花
白々と慚愧の朝へつゞく道　心府
（佳）白雪が眞一文字に横斷機　相原
（同）病室の壁の白さにあきて春　心府
（同）ぼんぼりへ京の舞妓の顔が浮き　健二

兼題　雪　心府　選

ラッセル車動く記事など雪の朝　一風
教會の塔から雪はふりはじめ　曉童
（佳）高下駄の鼻緒がきつい雪の朝　同
（同）雪の夜のつきぬ話となりにけり　一風
（人）雪チラリ別れ昔丘を思ひ出し　蛇之助
（地）雪解けへ坑夫の遺骸下山する　宵明

（天）牡丹雪女は酔ふた窓へ倚り　曉童

兼題　目　標　宵明　選

先生の言ふ目標へ陽がまともに　一風
（人）笑はれてゐて目標を失はず　小樓
（地）目標の向ふをパラソルゆきすぎる　心府
（天）子を持つてわれ目標の平凡さ　史朗

兼題　豫　感　史朗　選

斷はられそうな豫感の應接間　心府
豫感とは別に女を信じてゐ　小樓
未亡人豫感の合ふた事も言ひ　曉童
豫感フト君の睫毛が氣にかゝる　健二
豫感から逃れる枕すけかえる　宵明
（人）處女の恐怖に豫感適中　曉童
（地）六感へ觸れる花瓶のバラが落ち　健二
（天）何の豫感もなくて拔擢　一風

川柳雑誌社

今治小集（今治）

八年十二月廿九日　於バーぎんれこ

渡邊曉童報

初馴染・三ヶ日

桃割、福　互　選

子を負ふて初馴染に目をそむけ　一風
福引へまだ殘つてる桐箪笥　健二
三ヶ日女は女連れでゐる　一風
福助の足袋も緣起に買つて來る　健二
桃割で元日を來る婚約者　小樓
桃割に結ふて炊事は母にさし　健二
三ヶ日誰からとなし誘ひ合ひ　小樓

第七回　一月二十二日夜　曉童居

春の宵、水仙

母、洗ひ髪　互　選

春の宵子のない二人氣輕く出　曉童
おでんやへ素足で立つた春の宵　同
春の宵落ちた手袋ふんでゆく　一風
水仙へ冷たき頬をすりたてる　小松
母があればと思ふボーナス　小樓
日曜の朝から妻の洗ひ髪　同
水仙が好きとは女給いぢらしい　曉童

第八回　一月二十八日　星湖居

別荘、ピヤノ　互　選

別荘へ電報が來たあはてよう　禧純
別荘のアンテナ高し夏の風　星湖
木犀が匂ひ別荘靜かなり　小樓
愛の巣へピヤノ大きく巾を取り　健二

二月二日　伊豫貯蓄

兼題　割　箸　平井小松選

家中が割箸で食ふピクニック　紫陽
驛辨へ割箸そつけなくさかれ　健二
割箸へこみあげて來る嬉しさよ　曉童
サービスに割箸忘れられてゐる　小樓

兼題　崩れる　渡邊曉童選

崩れ泣く女に強い事を言ひ　心府

席題　まるいもの　野本逸居選

らんかんがまんまるう浮く京の宵　宵明
（人）あどけない許り十九の丸い顔　健二
（地）砲丸へ秋は晴れたり力瘤　宵明
（天）圓光の灯にもたいなし彌陀如來　曉童

席題　灰　曾成部宵明選

思ひ出し笑ひに灰がまいあがり　小樓
灰かへてさてお鏡の位置もよし　曉童
（軸）灰神樂老眼鏡にあわてよう　宵明

川柳雑誌社 簸川句會（出雲）

二月五日夜　於緣之助居

緣之助選

あつけ無く巨頭轉向聲明し　雅天
轉向に生活をすて戀をすて　羅門
轉向すれば木魚の音もしたしまれ　大郎
轉向の一人は肺を病んでゐる　比佐緒
（人）轉向はたはごと言葉の濁りたる　好郎
（地）轉向を誓つた日から腐つてゐ　紫光
（天）ひさにぎのげんじつ自殺か轉向か　羅門

兼題　灰　皿

灰皿の煙見つめて〳〵太き溜息　比佐緒
灰皿に失望の煙吐いて夜　紫光
憂鬱の灰皿に殘す吸殻の山　石楠花
灰皿のパットの餘煙にも似た戀　大郎
戀の眼戀の眼灰皿におち合せる　田鶴緒

兼題　馬

馬車馬も此處が居酒屋を知つてゐる　石楠花
恩給で馬を飼ふてる豫備少佐　紫光
春は丘へ愛馬の脊にまたがつて　緣之助
多感な日を代々家系の馬々曳き　同
乘馬隊滿蒙の野に砂煙り　比佐緒

兼題　足

足のつかれ心のつかれ就職戰　好郎
足地を離れて百姓は痩せり　羅門

兼題　重　壓

重壓に耐へかねた青春の爆發　好郎
重壓に嵐を呼んだ魂よ　淨二
重壓を逃れし身のうつろなる　紫光

川柳雑誌社 螢ヶ池句會

二月十一日　石森靜太報

作句熟凄く、その將來を待たるゝ思ひに悅しく終始した會合ではあつた。懸賞角力吟など非常に盛會に終る。

兼題　旗

よろこびに狂つてゐる旗の波　靜太
雜沓のなかに日の丸目立つなり　松雨
國旗立てゝ日本晴の空をみる　綾紅
（佳）青バスに旗もつかれて夕暮れる　狸庵
（同）旗まいて歸る選手の砂埃り　愚寵
（同）親善の今日外國の旗を立て　青鬼
（秀）旗ひとつ裏街の風がつめたい　一更

兼題　金　庫

帳ぢりが合はず金庫とにらめつこ　青鬼
給仕から上つて金庫の中を見る　志津女
店の間に金庫もあつていい暮し　白蝶
景氣よく手提金庫のふたがあき　ハルオ
居殘りは金庫のわきで事務をとり　敬人
實印を金庫へ仕舞ふ支配人　靜太
金庫置く場所を易者によく尋ね　綾紅
金庫から金庫へ紙幣のあつけなし　風心子
頻落ちた人に金庫はあけられる　靜太

兼題　あの日

池に石投げてあの日がかへらない　愚寵
戀知つたあの日の頃の繪封筒　靜太
凱旋にあの日の敵を語り合ひ　青鬼
あの日から母親寂し、顏になり　市郎
日記帳開いてあの日思ひ出し　岸岩

兼題　女　工

桃節句近く女工に夢があり　愚寵
艷歌師へ噂の女工塗つてくる　靜太
胸やみて歸省る女工は陽を仰ぎ　一更
郷愁の女工へ桐の葉が落ちる　靜太
おしろこへ女工四人の氣がそろひ　同

兼題　國　防

國防宣傳へ一錢銅貨おちてゐる　靜太
（佳）國防ぐ人らに櫻咲いてゐる　愚寵
（同）國防へつら〳〵世界地圖をみる　青鬼
（同）國防の婦人に花を買わされる　綾紅

兼題　見　舞　互　選

そこへ來たついでと言ふが見舞に來　青鬼
見舞がシヤンゲとみんな靜かなり　狸庵
片カナも混りおとゝの見舞くる　綾紅
見舞人へ新らしいマスクを掛ける　一夫
見舞客持來たかしをたべてゐる　後水
見舞はれるわたしは四十キロですの　靜太

川柳雑誌社 梅田同人句會（大阪）

一月二十四日夜　於松枝靜波居　鮎美報

兼題　制　服　清記互選

制服を着てもやつぱり父の顏　白菊
制服の寫眞がたみになつてゐる　觀月
口笛を吹く制服へ水光る　鮎美
制服い姿のまゝに醉ふてゐる　白菊
制服の月と歩いて戻りけり　鮎美

兼題　散　髮　觀　月　選

散髮の日向に蠅が飛んでくる　鮎美
（佳）散髮もしろよと意見しまひな　夕鐘
（同）けつまずいて散髮屋を出てゐる　鮎美
（軸）散髮の夫婦がかりで出來あがり　觀月

席題　梅　夕　鐘選

紅梅へ膝をくずして夜が長し　鮎美
(秀)梅に來てかほりのままにぎりしめ　卜居
(同)梅白う匂ふ茶室の湯がたぎり　鮎美
兼題　犬　鮎　美選
犬の慾たゞいつしんに尾をふつて　夕鐘
(佳)訪づれば犬を叱つて出で給ふ　觀月
(軸)犬泳がせて濱の別莊　鮎美

いかだ詩社例會（松江）

十二月十四日於　柳人居　祥月　報

夜話、柳人選。仇、夢迷選
芋、都之介選。首、卷二選
夜霧、祥月選。

夜話は思ひ〳〵に木賃宿　夢迷
夜話は不景氣らしい聲になり　祥月
夜話を時計無氣味に聞いてゐた　夢迷
夜語りに船頭小屋は雪もよひ　都之介
戀敵思ひもよらぬやさ男　都之介
仇討ちへ理智を殺した酌をする　柳人
燒芋を懐にして雪の夜　祥月
芋食つて見る一日のカロリーぞ　夢迷
芋の湯氣田夫野人の食慾よ　柳人
首を塗る技巧を知つた十八九　柳人
猪首の男チップをはずむなり　都之介
アーク燈夜霧の深さ見せてあり　柳人
エキゾチック洋畫研究所の夜霧　都之介
夜の霧に黑きはエトランゼの船か　同
捨て猫の如く夜霧の賣春婦　同

一月廿日夜句作に耽る（二）　祥月報

席主　義　岡崎祥月選

したゝかに主義の寒さを知つた獨房　天痴人
女給さん感傷主義は捨てなさい　都之介
資本家に唯彈壓のあるばかり　夢迷
結局は主義を越えたる日本魂　莞路

席題　死　線　王城浣路選

朝霧に死線しつぽり濡れてゐる　二郎
危くも死線鐵路に生きてゐる　祥月
カルモチン死線の海を泳がせる　卷二
カーテンの默禱死線を越えた瞳に　天痴人
焚火して死線を越えた遭難談　夢迷
頰骨も高く死線を越えて來た　卷二

席題　女　氣　左耳井二郎選

男性に生れ變つて見たい　そうだ　天痴人
女氣のどつちも錦紗同士なり　卷二
白粉の延びぬ四十の女氣よ　同
女氣をほめてのんだり踊つたり　祥月
女氣についほつれ毛をかきあげて　磨須雄
(佳)女氣を知つて居ります糸切歯　卷二
(同)激情を涙で濟ますも女氣の　莞路

二月八日夜（三）　祥月報

席題　梅　二郎選

眼ざむれ梅ばら〳〵と夢に散り　磨須雄
定期券梅から櫻とはなれり　卷二
春の陽に梅ゝ靜かに咲いてゐる　祥月
梅咲いて村長の娘にむこが來る　都之介
庭の梅から春と知る水枕　莞路
雪をあざける梅が咲いてる　天痴人

席題　爪　都之介選

爪長く小指に戀があるらしい　祥月
逆境に埋れいつか爪をとぐ　卷二
戰はんと欲する時に折れた爪　須磨雄
逢ひにゆく音だ鋏が爪を剪る　天痴人
バイブルを下敷にして爪を切る　二郎
爪を嚙む癖が閣下の名をたかめ　勁一郎
爪の色栄食主義よさびしかろ　天痴人
爪に垢ためて麻雀に勝つてゐる　莞路

席題　玉　葱　天痴人選

風呂敷の中は何んだい玉葱か　都之介
玉葱が母と並んで切つてゐる　二郎
玉葱と肉とですます二階借　莞路
(佳)玉葱に泣こうホームを造ましよ　都之介
(同)玉葱は下女の嬉しい事を聞き　卷二
(同)農學校キャッチボールの玉葱よ　都之介
(同)玉葱の味噌汁が出來ぢ子と並ぶ　二郎

席題　愚　痴　莞路選

素氣なき三ヶ月に愚痴捨つるなる　都之介
三味線の愚痴は醉ふてゝからの事　卷二
妻の愚痴襖の外にもれて來る　祥月
長火鉢愚痴の向ふは色男　都之介
愚痴一つ言はず便所を拭く女　二郎
空想の亂脈に愚痴青白し　都之介
アイラヴュー三十男の愚痴愚痴　磨須雄

席題　紙　幣　祥月選

紙幣ひらりあさましき足元に落つ　都之介
貞操を賣ると知らない五圓札　卷二
五圓紙幣のしわさへ尊い百姓だ　天痴人
妓もう紙幣の魅力にしびれたり　二郎
紙幣の厚さよ僕は銀行の給仕です　天痴人
猪一枚前後不覺となりにけり　都之介

席題　長　襦　袢　卷二選

緋の襦袢ちら〳〵見せる程に醉ひ　莞路
春風がひらひらせる長襦袢　勘一郎

長襦袢見せて女の酔ふてゐる　莞路
姿見へうれしい夜　長襦袢　勁一郎
完全に長襦袢のとりこなり　磨須雄
長襦袢遊ぶ男でうつります　天痴人
長襦袢しつかしろと叱られる　祥月
青春を捨てまいとする長襦袢　二郎
長襦袢失戀させる色でない　天痴人

雑誌社　川柳　**吹揚吟社句會**（今治）
一月二十日　於伊豫相互貯蓄支店樓上

渡邊曉童報

兼題　泉　史郎選
嬉しさを泉水へくる小間使　曉童
桶さげて泉の底へ朝の顔　心府
探檢の凱歌泉を取りまいて　宵明
神泉へすがり切つたる人の世の　みの助
（人）血や吐かん泪の泉涸れはてゝ　一風
（地）オアシスで夕陽の入るハッキリ見　曉童
（天）深山の泉のそばの捨草鞋　宵明

兼題　朝　小樓選
獨身の朝へ電燈冷たすぎ　星湖
障子いさんの一段づつへ朝が來る　みの助
歡びへ練歯磨を出しすぎる　曉童
（人）もの干しのベビー服なら朝が明け　曉童
（地）旅役者逃げた噂の朝の霜　同
（天）今朝も亦何か祈って見度い失業　史郎

席題　やぶれしものゝ姿　曉童選
（人）啄木の詩集が一つ遺留品　一風
（地）離れ行く心は河岸の灯をみる　心府
（天）出迎へもなく樓橋へ着くチーム　星湖
（軸）沒落の長屋に知つた人間味　曉童

席題　書　留　逸居選
書留へ感謝がつゝく卒業日　小松
（人）書留へ下宿日長き春の陽　健二
（地）書留へ下宿の今日の變りよう　心府
（天）書留は母の情の手とわかり　小樓

席題　丸　刈　宵明選
冬の夜を丸刈寒く戻つて來　小樓
丸刈で戀には遠く生きてゆき　健二
丸刈の青さは級の模範生　逸居
丸刈になつてハッキリ思ひきり　小松
（佳）宣德へ丸刈の手の太すぎる　曉童
（同）丸刈で兄はお嫁を忘れてる　一風
（感）丸刈の佛間へ廣く坐るなり　曉童

席題　牛　乳　心府選
病床にまだ牛乳のあるなやみ　小松
（佳）牛乳が朝の光りえ置かれる　宵明
（人）牛乳へやもあで通ゞ氣がくぢけ　曉童
（地）牛乳へあの青空の戀しさよ　小松
（天）牛乳に馴れて子供は親に似る　同

ABC吟社新年句會（松江）

一九三四年一月三日　於平塚別館

席題　冬の陽　法泉子選
冬の陽が雀の群を移らせる　天痴人
冬の陽に表情がある思出よ　六郎
（佳）冬の陽に水まん圓く輪を畫き　青波

席題　歸　る　天痴人選
歸る車窓へ女の顔がちらちら　茜草女
歸る子へ祖父はキャラメル買ってや　春朗
歸省してよき事はなき話聞く　法泉子
（人）東京の匂ものせて歸る友　茜草女
（地）肺病にされて工場から歸り　六郎
（天）歸省の日故郷の山は澄んでゐる　春朗

席題　果　物　朝選
果物にマダムの舌の多情なる　天痴人
はにかんで菜果の皮のむけかれる　鈴鹿
景氣よく蜜柑の初荷とゞけられ　青波
（佳）光明もなく果物の皮をむく　法泉子

席題　靴　下　六郎選
（佳）香下の穴も淋しき十二月　法泉子
（同）香下が不平の足と知つてゐる　天痴人
（同）香下は短し春の陽に踊る　法泉子

席題　九（讀み込み）　互選
三十九マダムよ鐵を知りたまへ　天痴人
未亡人九官鳥も飼つてゐる　茜草女
九年度の地圖は日本が廣く見え　六郎
頰紅は十九といつて悲しさう　喜郎

いかだ詩社一週年記念句會（松江）

一月七日　祥月報

誕生日、二郎選。純情、都之介選。躍る、菩二選。
幹事、祥月選。

誕生日子が床前に座るなり　玲兒
ともかくもますしい中の誕生日　利郎
誕生日皆喜びの膳に來る　祥月
純情が戀しい冬の月となる　二郎
純情な瞳に復讐の第一歩　祥月
純情の浮世をせまく住んで居る　玲兒
酒のめば驗に躍るものの影　都之介
先輩は醉ふて幹事を踊らせる　二郎
人の良い顔で幹事の席に居る　菩二

つどひ　第廿一回

結び目へ念を入れる母もにして　姫田夕鐘報　水車
縁結び旅の疾れもおもしろく　同
襷を結んでくれる女の息を受け　夕鐘
切戻を圍んで妓等の駒結び　同

紅茶の夕

二月七日夜　於喫茶店百萬兩　鮎美報
休憩が見付けた聲で戻つて來　水車
休憩のせはしきものに腕時計　同
休憩のバットは折れた君と僕　鮎美
休憩のベンチに梅の暖かき　同

一沫、靜太、對座吟

二月三日　於百萬兩パーラー　靜太報
氷雨する交叉點の新聞賣り　一沫
氷雨するベンチへ新聞紙のある　同
見合ひのよるの氷雨してゐる　靜太
裏切つて氷雨の夜をひとりゐる　同
いらつしやいまレコードを變へる　同
ふと氣がつけばレコードのから廻り　一沫
吸ひがらの煙にむせて一人ゐる　同
逢引のたばこの煙面白ろし　靜太

艸樂居小集　一月八日

夕鐘選

蕾　夕鐘　艸樂
大きな期待をかけられた蕾です
會へる日を數へる蕾の堅さ　機見女
はかなきぼけの蕾に似たる夢　同
鶯の足で蕾が一つ落ち　小松園
仰山な蕾だつせと鉢を見せ　水車
(軸)卓の上蕾の影はさびしけれ　夕鐘

化粧　機見女選

お化粧へ若き夫は煙草にし　艸樂
置炬燵化粧の顏を近よせて　夕鐘
化粧今鏡の惡い事も言ひ　水車
職業が變つてからも引眉毛　小松園
化粧法とやらで蒸したり冷したり　同
(軸)浮かぬ日の化粧へ赤い灯がもり　機見女

口笛　水車選

口笛へ窓を靜かに開けてゐる　夕鐘
口笛へまだ〜若い父なりき　小松園
口笛のなす事もなき日曜日　新水
口笛で行くと後押し頼まれる　同

世繼　新水選

平凡に生れて世繼それでよし　艸樂
世繼だけ枕許まで呼び込まれ　小松園
爭ひを他所に世繼は乳房にゐ　水車
(軸)世繼は世繼師匠とはなれず　新水

華水居小集（神戸）

二月十日　明珠報

渾身　竹楓選

渾身の努力に靴の紐をしめ　明珠
息と息合うて棒押負けられず　靖弘
(人)渾身の面へ春の日がのぼる　春秋
(地)渾身へ金槌のあるのを忘れる　華水
(天)渾身の力へ智惠者おし　明珠
同　時　默り　珠選

鉢合せして電報を信じて居る　吉左右
肉眼の同時へタイム秒を割り　春秋
發車ベル片足かけたとこで鳴り　竹楓
見凝める　靖弘選

みんなから見つめられてる中に住み　明珠
盛裝は胸に背中に眼を感じ　竹楓
向上心冷やかに大地見つめる　繁堂
(佳)未亡人の小犬牧師に見つめられ　幸捐

怯える　華水選

不眠症讀みつかれたる犯罪史　吉左右
何か怯えてる目白の籠が搖れ　竹楓
先生の眼に怯えつゝペンを置き　明珠
おびえきつて肩をよせてる　春秋
(佳)靈柩車へ怯えた時もありまた　繁堂
(同)怯えたる眼の色靴の音を聞き　明珠
(同)追想をさけようとすゝ風の音　吉左右
(軸)今日までの罪に怯えし不眠症　華水

可憐　春秋選

菓子鉢へ可憐な少女手を出さず　靖弘
猫なぜて病の床の少女なる　華水
級長に慣れて娘の胸を病み　幸捐
(佳)口をもぐもぐおつばいの夢ばし　竹楓
(同)もの云はぬ親牛仔牛つゞ來る　同

白扇居小集（京都）

二月二日夕　司郎報

席題　闇　司郎　竹雅選

音去りて闇の中なる我を捨てる　司郎
遠吠えて少しおびへた闇の影　光風
腹の立つ心で闇をみつめて居　豐次
(人)僕を泣かせてくれる闇があつた　陸平
(地)灯を消して涙を拭かうともしない　迷兆
(天)魂をつかんで闇をころげゆく　光風

席題　便　箋　啓　秀選

便箋に男女をうたがいぬ　竹雅

便箋へインキが出ない背となり　光風
便箋へひとゝき拔毛かき集め　司郎
(人)腹の立つ事便箋のたゞ白し　光風
(地)便箋の端へちょぴり春　酒落　司郎
(天)便箋に淋しい言葉あるばかり　曉聲

席匿　走り書　陸平選

鉛筆の折れたとこあり走り書　豐次
走り書戀の瞳のうるたへて　迷兆
(人)走り書見馴れた辯のなつかしく　司郎
(地)戀人の姉さん走り書を吳れ　甫三
(天)フェルトの新が失せてる走り書　竹雅

席匿　敬禮　白扇選

敬禮に嚴父であるを意識する　司郎
敬禮の五本の指が生きている　光風
(佳)敬禮の足にゲートルころげてる　甫三
(同)敬禮の準備帶物を持ち變へる　啓秀
(同)敬禮の姿を母が嬉しがり　同

席匿　烏　司郎選

烏鳴いて旅を淋しいものにする　陸平
烏鳴く下で戀人まつてゐた　光風
(人)大雪の話烏ポツネンと居る　白扇
(地)ふるさとの烏を想ふ草が萠へ　光風
(天)烏止まつて淋しい木にする　豐次

川柳雜誌社　**梅田誌上句報**（大阪）

席匿　チャップリン　かほる選

飴賣りのチャップリン犬に吠へつかれ　秀峰
チャップリン後姿のさびしすぎ　遊歩
交渉へちとたよりないチャップリン　靜波
夕陽の丘獨りぼつちのチャップリン　卜居
灯の下で銀貨をぐむチャップリン　鮎美
いつのまにかへ來てるチャップリン　觀月
(人)チャップリンつまづいた石に腰をかけ　鮎美
(地)チャップリン笑はぬペンをしらせる　同
(天)まちがつて肩をたたいたチャップリン　觀月
(軸)ないよりステッキを持つチャップリン　かほる

席匿　味噌汁　水車選

順番に味噌汁ついでもらふなり　觀月
味噌汁に海岸線は晴れわたり　卜居
二日醉味噌汁ばかりほめて吸ひ　靜波
味噌汁に小さき母の影があり　鮎美

日本一周記念句會（神戸）

一月拾五日　於幸捐居・幸捐報

席匿　スタンプ　互竹楓選

スタンプを拾ひ歩いた一人旅　幸捐
スタンプを頼めば日附合はすなり　幸捐

席匿　土産　吉左右選

寢むられぬ車中土産をあけて見る　華水
いそがしい旅の土産のわさび漬　竹楓

席匿　非常時　春秋選

非常時の一役を持つ犬の顔　竹楓
非常時へ子供のラッパよく響き　華水

川柳風呂（その十一）

葉書　水谷鮎美報

頼まれた葉書は墨がすつてくれ　遊歩
待ちかねた便り葉書にものたらず　靜波
失職のある日往復葉書來る　觀月
もう一度見直す葉書ポストへ來　白菊
母らしき涙葉書の字が讀めず　鮎美
二三枚葉書をかいて急な旅　同

川柳雜誌社　**部友會**（神戸）

一月二十七日　於明珠居　吉左右選

席匿　人間

人間の捨場へ波は靜かなり　幸捐
人間の强さを知るや鐵の山　竹楓
パッチぬいで人間をおかしがり　華水

席匿　皮肉　竹楓選

皮肉にも金のある日がいそがしい　明珠
皮肉家の額てか〳〵つやがあり　吉左右

席匿　火事　幸捐選

火事あつて火事の記憶を聞かれる　春秋
火事見舞安心をしたお茶をのみ　華水
物干の褌抱に火事が續いて居　同

席匿　引力　華水選

引力を無視して魔術師靜かなり　竹楓
引力に抗しハンマー振り上げる　明珠

席匿　寢言　明珠選

寢言にはふれずおかしい朝の膳　竹楓
寢言にも慣れてゐるんだ二階借　華水
子の寢言火鉢へ寒い手をあぶり　吉左右
小使の寢言へ火の氣見當らず　幸捐
奥樣の寢言へ猫の目が光り　同
(軸)母親に寢言聞かれた朝を起き　明珠

席匿　カロリー　春秋選

カロリーのある飯を食ひゴルフする　明珠
カロリーの足りない人の生あくび　竹楓

ひかり集（二十二）

水谷鮎美報

童顔のロイド眼鏡も朝のもの　卜居
童顔の青き眼鏡をさびしまれ　同
童顔に眞白き晝があるばかり　鮎美
童顔へ子の汽車が着いてゐる　同

川柳家戸籍調（續）

（係）山雨樓

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手ゝ染めた年月

（361）　龜井愚寵

（1）龜井武男（2）愚寵（3）明治四十一年七月二十日（4）富山縣伏木（5）大阪府豐能郡麻田村（刀根山病院）（6）隨而この欄は入院加療中と言ふところです（7）かなりたくさんありますので、川柳をやり初めた頃から今でもなほ覺へて居りますものを。秋さらり銀の襖のもの思ひ（路郎）父さんは川柳々々と言つてるよ（路郎）よいはしご天までとどくよいはしご（ロンちやん）等々記せば限りがありません。自分の身邊の人の句では、亡くなつた奈緒美の。夕日出てゐる雀がたんともどる夕となればはるか電車のひびきあり（靜太）等が好きな句です。（8）自信の句と言ふものが、そのときの自分の氣持ちを云へたものだとすれば、「ぼくはびようにんぼくののぞみもかはつたな。病院を抜け出て乞食などせんか。等です。しかしこの氣持ちがすでにかはつてゐつてゐるのではないかと思つて居ります（9）園芸讀書、キネマ、散歩（10）ナシ（11）食べものでは、あまりなし。人間のようけよつてゐるところ、然し反對に人間がとても好きなのかも知れません（12）昭和四年秋

（361）　石森靜太

（1）石森太三郎（2）靜太。妥兎美子朗。その他句のたくさん出來た月は其の時の時分によりてなします（3）明治四十二年八月三十一日（4）福井縣坂井郡三國町（5）大阪府豐能郡麻田村一番地中十號室（6）大阪市立刀根山病院入院加療中（7）愛誦の句はたくさんありますが特に。ひとり居ればひとりは限りなくさびし（路郎）赤松のみどりが僕を生んだ村（山雨樓）は自分を寂しくさせてしまひます。時には泣きたくなります。病人である僕には強くひびきます。其の他書けば限りありませんが葉平さんの句は心を打たれます。愚陀さんの句はほとんどが好きです。私達螢ケ池支部先輩の句で好きなのたくさんありますが、句の上で奈緒美愚寵、噴兒、寒子等、自分をはげましてくれます（8）いつも活字になつてから愚寵に悪い處を指摘されるので成る程と思つて（心から）眞險に勉強中です（9）映畫、ピンポン、魚釣り、スケツチ、マンドリン、蒐集（10）勿論ありません（11）責任感のなき人（12）昭和六年七月初め（入院直ちに裕流之助、畑中康夫兄らにより教はる）

（362）　平井春光

（1）平井治三郎（2）春光、千爲（3）明治三十七年七月八日（4）大阪市西區岡崎橋（5）大阪市大正區大正通六丁目九二（6）自動車運轉者備考最近運轉手といふ名稱が變りました（7）ふりむけば夢多かりし運動場（愚陀）友が歸ると秋空の色がまし（愚陀）走つて行けば誰もゐない日向（亂耽）（8）御文章筥も一諸に拜まれる。春の風孔雀の羽毛にひつかゝり（9）松之助時代から映畫ファン（10）どちらもなし（11）軟體動物（12）昭和七年八月頃

川柳雜誌の合本

本誌の合本並製が簡素な裝幀に出來ました。第二卷から第十卷迄あります。殘部が澤山ありませんから御希望の向は至急御注文下さい。

特價　金壹圓五拾錢也

送料　市内　壹册　六　錢
　　市外　同　二十四錢

編輯の窓

山雨樓

▼路郎先生がお忙がしい中から毎號執筆して下さることは愛讀者諸君と共によろこびに堪えない。

▼久し振りに閑生氏が健筆を揮はれた「句をめぐりて想ふ」は滋味と含蓄に富んだ名篇である。毎號氏の麗妙なる筆致を期待するのは獨りわれ等のみではない

▼艸樂氏の「江戸時代史ここかしこ」は、ともすれば忘れ勝ちになる江戸時代、歴史背景が、古句鑑賞に缺ぐべからざるものであることを指摘した、好文字である。

▼本紙の表紙繪は毎號非常に好評であるが本號は大西長三郎畵伯を煩はした、大いに麗筆を味はつて頂きたい。斯うした斬新なプランで進んで來たことは、聊か誇とするところである。

▼武玉川研究並に以前本誌に連載した肱枕艸紙でお馴染の梅本塵山翁の「古狸窟雜筆」は曾て蛭子省二氏の得中慰安の爲め書き送られたもので、同氏の好意に依り(翁の快諾の下に)連載の運びとなつたことを諸君と共に欣びたい。

▼雜筆春秋欄には新同人加藤文醉、毛利九波兩君のものを始め新人の活躍が見ることが出來たのは嬉しい。

▼本紙の權威的存在たる武玉川初篇研究も愈々あともう一回で完了することゝなつた。そして第二篇も既にその一部が本社へ着してゐる。執筆諸先生の絶大なる御努力に對して萬腔の謝意を表すると共に、切に御自愛を祈る次第である。

▼月評は二月十四日の夜艸樂居を煩はした。烈風吹きすさぶ晩であつたが寒さにもめげず皆熱心に討論した。愛讀を祈る。

▼二月三日の本社句會では僕が「初代川柳の顔」と題して話をしたが、三月句會は二南君が話をすることになつてゐる。演說のうまい同君の事だからいづれ面白い話題が聞かれる筈だ。御期待を祈る。

▼二月二十日の晩東北川柳の大谷五花村氏の能因會の齋藤一力吉田汀舟、鹽田泰山、安田喜四雄、永谷葉吉等と共に團體旅行で湊町驛へ着かれたので路郎先生や一歩、雨迷、汀柳、六浦の諸氏と共に出迎えた。同夜は引續き南地で歡迎の宴が張られ、更に道頓堀の夜景を紹介するなど一行の旅情を偲び談笑の時を惜んだ。

▼最近本誌の傾向を目して「中間派」と稱するものがある。北海道で「氷原」が出てゐた頃同誌もそんなことを書いたが、認識不足なんだから仕方がない。しかしこの儘默殺しておくことは初心者に誤解を招く虞れがあるので、近く啓蒙の筆をとりたいと思つてゐる

▼久良伎翁が三味線草一月號に「甲戌柳壇を迎えて」の中で路郎先生の「君見たまへ菠薐草がのびてゐる」を引例して書いてゐられる。これもわからぬものはわからぬのだと默殺しておいたが序でに筆劍を見舞ひたいと思ふ。

◆西之町MEMO(續)

▼主幹路郎先生は近々滿洲地方へ川柳行脚される豫定です、詳細は近く發表致します。

▼本社四國各支部で聯合大會の準備中。決定され次第誌上に發表致します。

▼本社松江、筬川・八束の各支部で聯合句會が催されるそうです、決定次第本社から福田山雨樓君出席される由。

▼本社伯耆支部が新設され三月一日創立句會が催されます。盛會ならん事を祈ります。

▼本社玉造支部が二月例會を廿五日夜催されました。本社から艸樂、八歩、白峰、四葉諸君私が出席致しました。當夜特に溪花坊、雞牛子の兩君が出席され有益な講演された事が見立ち、なか〳〵盛會でした。

▼姫田夕鐘君は近く結婚されるので郷里(四國)へ歸へられましたお喜び申し上げます。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十一卷第五號課題

三月五日締切

（各題十句以內）

▼猫　西田艸樂選

▼袴　西村山月共　竹內機見女選

第十一卷第六號課題

四月五日締切

（各題十句以內）

▼櫻　水谷鮎美選

▼祝儀　生田翠夢選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年二月廿五日印刷

昭和九年三月一日發行

第十一卷　第三號

（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社　電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社　振替大阪七五〇五〇番　電話天王寺一一六七番

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

賣捌書店

（大阪）大實捌二盛社書店。（明文堂其他市內各書店）

（東京）東中仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（函館）石塚

（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

川柳雑誌社關係の人々

（順はろい）

賛助員

池澤樂居　伊藤彦造
長谷川一徹　鳥山一歩
大道弘雄　大島濤明
岡本一平　大谷五花村
片岡直方　岡田三面子
笠原路生　亀井晟修
嘉納純　川上三太郎
田中辰二　川村花菱
長崎柳秀　米村あん馬
長岡牛太郎　田村孝之介
長野晴濱　谷脇素文
國枝史郎　窪田銀波楼
藤村作　長野吉高
藤本卯之助　安川久流美
赤井清司　前田雀郎
淺田一　前田五健
末弘嚴太郎　柴谷柴舟

同人

原春雨　姪子省二
村松夢裡　藤里好古
村田新市　森東魚
街三輪　水谷鮎美
山本丹路　芝四葉
朝田新水　平井蒼太
阿部閑生　平井春光
福田鶴峰　姫田夕鐘
増位汀柳　日野華水
松下小柳子　東谷聞路
山本雨迷　平井冬呼
芝四葉　毛利九波
朝田新水　須崎豆秋
阿部閑生　首藤竹楓
福田鶴峰　庄萬よし
増位汀柳　石曾根民郎
松下小柳子　岩崎柳路
山本雨迷　奥野秀山
芝四葉　熊谷紅
朝田新水　江戸みつる
阿部閑生　阿形一杉
福田鶴峰　明石柳次
増位汀柳　長谷川三汀
松下小柳子　西山月
山本雨迷　近藤勇
芝四葉　妹尾變人
朝田新水　後藤青兒
阿部閑生　吉川啞人
福田鶴峰　眞田幸捐
増位汀柳　北山悟郎
松下小柳子　喜多春秋
山本雨迷　西田帥樂
芝四葉　高橋かほる
朝田新水　吉田水車
阿部閑生　春元紀太
福田鶴峰　生田翠夢
増位汀柳　北川あや美
松下小柳子　谷村稔
山本雨迷　立井登美坊
芝四葉　中西おさむ
朝田新水　中見光路
阿部閑生　岸上錦石
福田鶴峰　宮岡白峰
増位汀柳　中澤濁水

編輯局（同人）

橋本綠雨　麻生葭乃
福田山雨樓　楊井二南
麻生路郎　住田亂耽

主幹

永田里十九

道頓堀支部（大阪市）幹事庄司郎　万よし
九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎　鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州
神戸支部（神戸市）幹事西村明珠　堺支部（堺市）幹事八木春峰　松山支部（松山市）幹事石丸春峰
函館支部（函館市）幹事亀井晟修　守口支部（大阪府）幹事朝田翠夢　御旅支部（大阪市）幹事田新水夢
高知支部（高知市）幹事中澤濁水　高岡支部（富山縣）幹事越田久水　天王寺支部（大阪市）幹事福田鶴峰
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美　御橋支部（大阪市）幹事村松夢裡
螢ヶ池支部（大阪府）幹事石森靜太　鶴町支部（大阪市）幹事妹尾變人　玉造支部（大阪市）幹事清水友帆
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬　松江支部（松江市）幹事梶谷巷二　大鐵支部（大阪）幹事植山九天
簸川支部（島根縣）幹事尼子絲之助　塗青支部（大阪）幹事熊谷紅
豐橋支部（愛知縣）幹事白井梅里　西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
京都支部（京都市）幹事平岩司郎　光耀會（大阪）幹事竹内機見女
萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野秀山　今治支部（今治）幹事渡邊曉童
北濱支部（大阪）幹事谷村稔　光笑會（大阪）幹事永田里十九
今里支部（大阪）幹事市塲沒食子　新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子
奉天支部（奉天）幹事江戸みつる　伯耆支部（鳥取）幹事湯原美笑

川柳雜誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）
改號、郵轉、句會案内、廣告、その他

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
月刊一部廿五錢郵稅一錢
東京淺草區小島町七一
川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

並製 合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで
各壹卷 金壹圓五十錢
大阪 市内送料 壹册 六錢
市外送料 壹册 廿四錢
▽申込期日 三月十五日〆切
殘部少數に付至急御申込下さい。
大阪市住吉區平野西之町八三
申込所 川柳雜誌社

光笑會

日時 三月十三日夜
所 カナメ喫茶店
題 「草 鞋」三句
所 大阪市南區疊屋町六
幹事 永田里十九

喫茶店 キング

大阪市西成區玉出本通三ノ三六（仲小路）
電話 天下茶屋 二五七九番

懸賞川柳募集

題 「さくら」路郎選
三月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願ひします
大阪市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

川柳きやり

創刊十五周年記念
川柳大會
日時 四月三日正午
會場 淺草公園傳法院大書院
會費 金五十錢
宿題 第一宿題「大丈夫」（二句吐）周魚選
〆切三月二十日（狗厩吟社大會係）用紙はがき
第二宿題「年頃」（二句吐）
當日持寄 雀郎選
五題 出席大家選
席題〆切午後三時
御出席の各位へ記念品並記念繪葉書呈上
▼大阪方面より出席者は川柳雜誌事務所迄申込み下さい。

迎春川柳會

（時）三月四日（日）午後六時半
（所）八宮神社内 楠町衛生事務所
神戸市電大倉山停留所下車東半町南側
（題）「草」三句
（費）二十錢
川柳雜誌社神戸支部
神戸市七番町四五

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一册 價金拾二錢（送料共）
▼御申込は本社事務所宛。
（一錢切手代用不苦）

川柳手拭

路郎主幹の染筆
二種 金三拾錢（送料共）

綠雨居偶會

日時 三月七日夜
題 「肌」三句
當夜全國の川柳の雜誌をみながら語りませう。
大阪市住吉區平野西之町八三
橋本綠雨
市バス平野線今川町東南三丁

清酒

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和九年二月廿五日印刷納本／昭和九年三月一日發行

川柳雜誌（第一二二號）

定價金三拾錢　送料金壹錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい
全國有名化粧品藥店にあり